



片平旧法学研究棟前桜 2025

会報

東北大学法学部同窓会

第 52 号

東北大学法学部同窓会

〒980-8576

仙台市青葉区川内

東北大学法学部内

Tel・Fax 022-795-6181

E-mail dosokailaw@gmail.com

発行日 令和7年5月30日

印刷所

(株)センキョウ



川内だより

会長 久保野 恵美子

昨年度に引き続き、法学部同窓会長を務めさせていただくこととなりました。昨年度は、同窓会の本部及び各支部等の総会・懇親会等に出席をさせていただき、同窓会の皆さまの各方面でのご活躍をうかがい、また、法学部への激励をいただきました。また、同窓会東京支部会に共催いただき、キャリア・ガイダンスを催すことができました。皆さまからのご支援に感謝申し上げます。と同時に、同窓会のさらなる発展に微力を尽くしたく存じます。今年度も、どうぞよろしくお願い申し上げます。

学部・研究科の近況等につきまして、教員スタッフの異動を中心にご報告いたします。

本年三月末に、坂本忠久教授（日本法制史）がご定年にて退職、大内孝教授（西洋法制史）が退職され、それぞれ名誉教授となりました。坂本先生は、二〇一二年に着任された後、二〇一三年度から二〇一四年度に教育研究評議会評議員をお務めになられま

した。大内先生は、一九九二年に本研究科博士前期課程を修了後本研究科に助手として採用され、爾来、三五年の長きにわたって、教育研究に尽力してこれ、この間の二〇〇九年には天野和夫賞を受賞なさいました。教育研究及び運営面にわたり学部・研究科に多大な貢献をしてこられた坂本先生、大内先生のご退職は、大変に名残惜しいことですが、先生方には、ますますご健勝にて、引き続き法学部・研究科を見守っていただきたく存じております。

また、本年四月、佐々木弘道教授（憲法）が、国立国会図書館（専門調査員）に転出されました。佐々木先生は、二〇〇九年に着任された後、二〇二一年度から二〇二二年度に法科大学院長をお務めになりました。本研究科への大きな貢献に感謝申し上げます。新天地でのご活躍をお祈りいたします。

一方、本年四月一日には、西土彰一郎教授（憲法）が成城大学法学部から着任され、また、ローツマイア准教授

が、教授（比較家族法）に昇任され、それぞれ本学の研究教育活動を担っております。

実務家の先生方の異動もございました。公共政策大学院では、昨年七から九月にかけて、石山英顕教授が総務省に、江口博行教授が環境省に、松村孝典教授が農水省に、それぞれ帰任され、替わって、原田賢一郎教授、永島徹也教授、川野豊教授が、各省から着任されました。

助教の動きにつきましては、昨年九月に、岩城田花助教が金沢大学人間社会研究域法学系講師として採用され、退職された一方、本年四月、肖陽助教が法学研究科博士後期課程院生から着任しました。

残念なことに、名誉教授の訃報をお知らせしなければなりません。太田知行名誉教授（民法）が本年二月一日に、また、柳父圀近名誉教授（政治学史）が本年二月一八日に、それぞれ他界されました。先生方のご功績に改めて感謝いたしますとともに、謹んでお

悔やみ申し上げます。

学部・研究科をとりまく状況といたしまして、昨年一月、東北大学が唯一の国際卓越研究大学として認定されました。これを受けて、研究の国際展開等を図り、研究力を強化するための戦略的人事を計画しており、また、研究科内に新設された戦略支援室に配属のURA（研究力強化等を支援する専門職）の支援のもと、研究成果の積極的な広報等を通じ、法学・政治学の意義を発信してまいりたいと考えております。また、同室に配属予定の国際対応専門職スタッフと共に学生及び教職員の国際交流を活性化させることや国際卓越研究大学として要請される研究助成金・寄付金等の外部資金確保などの課題にも、取り組んでまいります。

新たな環境のもとでの飛躍は、同窓生の皆さまの多方面にわたるご経験、ご知見から学ばせていただくことなしに、遂げることはできないと考えております。法学部・法

学研究科の後輩たちのために、より一層のご指導ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、同窓生の皆さまのご健勝と益々のご発展をお祈りいたしまして、ご挨拶といたします。

学生活動支援金へのご寄付のお願い



東北大学大学院法学研究科教授

中 林 暁 生

(H9卒)

今年も新学期が始まり、中善並木の桜が新入生を迎えています。この中善並木の桜の植え替えには、法学部同窓会より、「中善通り桜移植支援」を目的として多額のご寄付を頂いております（二〇二二年）。この際のご寄付の受け皿となりましたのが、「東北大学基金」の中の「法学教育研究支援基金」です。東北大学基金とは、「本学における教育研究環境及び社会貢献活動の整備充実を図るため、指導的人材の養成、世界最高水

式）、多くの方々からのご寄付は、これまで以上に東北大学の成長戦略の重要な柱の一つとなっております。

東北大学基金の中で法学部・法学研究科を支援するものとして設けられているのが、前述の「法学教育研究支援基金」ですが、二〇二三年、この法学教育支援基金の主な用途の一つである「学生生活（学習、留学、課外活動等）」を支援することを目的として、「学生生活活動支援金制度」が設けられました。具体的には、「法学部・法学研究科の自主ゼミ等の学生団体もしくは学生個人につき、全国大会等において優秀な成績を収め若しくは地域社会に多大なる貢献をした活動、又は法学部・法学研究科における学習に際して高い教育的効果をもたらすに特に経済的支援を要するものに対し、その活動に係る旅費等を支援し、指導的人材の養成及び社会貢献に資すること」を目的としています（学生生活活動支援金要項二条）。法学部・法学研究科のホームページに学

習活動支援金の募集案内を掲載し、ひろく学生に周知しているところですよ。

二〇二三年度は、前期開講の授業「国際法演習」履修者有志が、国際法模擬裁判の大会 Asia Cup 2023（国際法学会及び外務省の共催）に参加し、東北大学チームは日本代表の二校のうちの二校として、口頭弁論ラウンドに進出し、原告書面で二位（タイ）に入賞しましたが、東京で開催された大会への旅費をこの学生活動支援基金から支援いたしました。また、二〇二四年度は、岩手県花巻市で行われた無料法律相談所による出張相談に対する支援も行いました。

二〇二四年六月に、国立大学協会が国立大学の財政状況についての緊急の声明を公表したように、国立大学を取りまく財政状況はきわめて厳しい状態にあります。そうした中、学生たちは、物価高の中で、勉学やサークル活動などに励んでいます。自主ゼミの活動が盛んであるという東

北大学法学部の伝統を守っていくことに、皆さまのお力添えを賜れますと幸いに存じます。

東北大学基金のホームページ（<https://www.kikin.tohoku.ac.jp/>）には、「寄附の種類」の中に、「学部・研究科等を支援」という項目があり、そこから「法学教育研究支援基金」への寄附を行うことができます。その際の用途の欄に「学生活動支援金制度」に充ててほしい旨をご記入いただくことも可能です。個人の方ですと、クレジットカード・銀行振込・コンビニ決済・郵便振替・PayPay決済・Amazon 決済で寄附を行うこともできます。税制上の優遇措置もございまして、千円以上をご寄付頂いた方には返礼品を差し上げております。法人・団体からの寄付も可能です。使途を限定することも可能です。詳細につきましては、ホームページでご確認ください。

皆さまのご厚意をお待ちしております。

令和6年度法学部卒業生、

大学院修了生に贈る

同窓会副会長・東京支部会会長

原 田 一 之

(S51卒)

「書を捨てる、町へ出よう」

まずは、皆さん、4年間の大学生活を終えられ、あるいは大学院を修了し、この度は、次々のステージへ旅立つことに、心よりお祝い申し上げます。私自身は、ほぼ50年前の卒業生でして、あまりに時代も環境も違っています。まともに学校へ行ってもいなかった自分が、皆さんへ卒業にあたっての饒の言葉を述べ資格などありませんが、同窓会を代表して東北大学法学部東京支部会会長として、一言お祝いの言葉を申し上げます。

皆さんは大半の方が、2021年の入学だと思いま

うな大先輩たちも、戦後の混乱期の中で学生生活を送った先輩たちも、そして私もオイルショックの波に翻弄された学生時代でした。しかし皆さんが経験されたコロナ禍での学生生活は、本来学生が、自由を謳歌して、酒を飲み交わし、多くの人と関わり議論するといった学生の身分といっても良い行為を否定されてしまったことと思います。私たちの時代は、真逆だったように感じます。しかし、コロナ禍が明けた後は、対面での会話や飲み会、議論百出のストームなどが復活したのではないのでしょうか。結果的に皆さんは、私たちよりずっと、この大切さを理解されているのではないかと思います。卒業後皆さんは、様々な道を行きますが、どのような道であろうとも、人との交流や対話は、最も大切であると考えています。コロナ禍の副産物として、リモート環境が整った今でも、経済界では、対面での仕事や、着実に戻ってきています。私が人の移動

や交流を支える鉄道事業や観光業を営んでいるから言っているのではありません。他の産業でもリモート勤務から出社へシフトしていると聞きます。リモートを活用した環境は、あくまでビジネスツールだと思っています。皆さんは、どんどんと表の世界へ飛び出していただく。その表の世界との交流が皆さんの新たな可能性を広げてくれるものと確信しています。歌人であり演劇集団の主催者でもあった寺山修司という作家の「書を捨てよ、町へ出よう」という本があります。私たちの時代の若者のバイブル的な本でした。書を否定するのではなく、学んだ書物を本棚に置き、町へ出ていこう、表の世界へ出ていこうと言っているのです。理屈ばかりをこねていず、まずは行動せよ、実践しろと言われている気がします。私自身もこの言葉に突き動かされて、これまで人生を過ごしてきたような気がします。しかしそのようなように、実践出来たかと言えば、

全くそのようなことはありません。長年にわたって鉄道会社で勤務している中で、少しはと思いますが、今でも毎日表へ飲みに行くことだけは変わらずに実践しています。本質的な意味は違うかもしれませんが、まずはそこから自らを叱咤しているところだと思います。

最後に少しだけ私自身が50年前に鉄道会社に入社した経緯をお話して、皆さんのこれからの人生の参考になればと思います。私の学生生活は1972年にスタートしていますので、いわゆる戦後の高度成長期、最後の時代でした。しかし1年半後の1973年に第1次オイルショックが起き、日本経済は大打撃を受けることになりました。その後1975年の卒業生は自宅待機や内定取り消しが相次ぎました。私が就職活動をしていたのが、まさにその年でした(当時の採用活動は、4年次の9月が面接解禁)。当然、採用する会社も激減し、全く勉強していな

かった私には、全く就職口がありませんでした。連戦連敗の中、地元の京浜急行が若干名の採用をする聞き、受験してみることにしました。特に鉄道やまちづくりに関心があった訳でもありませんでしたが、なんとか入社出来ました。その後様々な仕事をして今に至っています。何を言いたいのかと言いますと、色々と期待して入った会社も、期待外れだと言うことは多々あります。しかしどのような仕事でも、経験する過程で、その仕事を好きになっていくことが重要だと思っています。真剣に取り組むことで、その楽しさや素晴らしさを感じることが出来ます。私もそのおかげで、今では「いっぱしの鉄道屋」となることが出来ました。ぜひ皆さんもこれからそれぞれの分野で、「いっぱしの〇〇屋」になれることを、心よりご祈念申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。



写真東北大学史料館所蔵

柳父先生を偲んで

東北大学大学院法学研究科教授

鹿子生 浩 輝

東北大学名誉教授でいらった柳父圀近先生のご逝去の報に接し、深い哀悼の意を表します。

柳父先生は、1987年に東北大学法学部助教授に就任され、翌1988年に教授に昇任されました。その後、1996年から1998年には東北大学法学部長・同法学研究科長を務められ、2009年に定年退職されました。長年にわたり研究と教育に尽力され、多くの学生や研究者に大きな影響を与えてくれました。

柳父先生は、西洋政治思想史の研究において、キリスト教と政治の関係を中心に幅広い研究を展開されました。代表的な著作には『ウェー

バーとトレルチ——支配と宗教をめぐる試論』(みすず書房、1983年)、『エートスとクラトス——政治思想史における宗教の問題』(創文社、1992年)、『政治と宗教——ウェーバー研究の視座から』(創文社、2010年)、『日本のプロテスタントイジムの政治思想——無教会における国家と宗教』(新教出版社、2016年)などがあります。先生は、これらの著書を含む多くの優れたご研究を通じて、西洋政治思想史と日本におけるキリスト教受容という二つの視点を統合し、独自の学問的立場を築かれました。

柳父先生が東北大学法学部で授業を担当されていた頃の

学生から聞いたところでは、学部1年のプレゼミで丸山真男『日本の思想』をテキストに選ばれたそうです。プレゼミであるにもかかわらず、その参加条件は『日本の思想』の感想文を提出するという、1年生にとってはハードルの高いものだったようです。先生にとって、プレゼミとは単なる導入科目ではなく、学生に対して深い思索を促す場だったのでしょう。

柳父先生の講義は、穏やかな語り口ながら、流れるように展開されるものだったと聞いております。当時の最先端の学術的知見を取り入れた刺激あふれる内容は、聴く者の多くを惹きつけていたようです。ゼミでの熱気あふれる議論は、多くの学生にとって忘れがたい経験となったことでしょう。先生の授業の魅力は、その内容だけではなく、随所に散りばめられた「雑談」にもありました。例えば、イギリスの議会における「ソードライン」の話や、アメリカの無教会主義の話など、

どれも非常に興味深く、今でも忘れられない、と伺っています。

大学院のゼミは毎週一回で3〜4時間に及ぶ場合が多かったようです。先生は、テキストの読解だけでなく、関連する様々なテーマについても広く議論するというスタイルを取っていらつしやったとのことでした。大学院ゼミは、テキストの読解力だけでなく、歴史的な視野、諸国を比較する幅広い視座を養う場である、という信念がそこから伺われます。

柳父先生は、研究者の育成にも力を注いでいらつしやいました。実際に修士論文や博士論文について指導を仰いだ研究者によれば、先生のご自宅で論文の検討をしていただき、多くの場合、食事を共にし、その後も夜遅くまで助言や添削をいただいたとのことでした。しかし、論文指導において先生から叱責されたという記憶はなく、常に励ましをもつてご指導いただいていたそうです。

ある卒業生は、柳父先生が学部長として祝辞を述べられた場面が強く印象に残っていると語っています。東北大学では総長が理系出身者であることが多く、卒業式の祝辞は、簡潔なものになりがちですが、その後の学部の祝賀会で柳父先生が語られたウェーバーの言葉からは、「卒業」の意味を本当に実感した、と聞かれています。先生との出会いは、多くの学生にとって、実に意義深いものであり、その教えは、今なお卒業生の思索の中に生き続けています。

柳父先生は、ご研究の知見を踏まえて、日本の政治の現状にもさまざまな場で警鐘を鳴らされていらつしやいました。特にキリスト教政治思想の現代的意義や、政治と宗教をめぐる緊張関係について、終生にわたって情熱的に学問的・実践的検討を続けられました。

東北大学法学部には宮田光雄先生以来の政治思想史研究の優れた学問的伝統があり、私が柳父圀近先生の担当され

ていた科目を前任者から引き継ぐ立場となった際、大変身の引き締まる思いをしました。私は、柳父先生とはわすかしが接点がなかったため、直接お伝えできることは多くありません。それでも、先生が遺された学問・教育の精神と情熱を引き継ぎ、次世代の学生たちに伝えていくことこそが、最大の敬意の表し方であると信じています。

柳父先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



連載 先生の研究紹介

行政法における理論と実務



東北大学大学院法学研究科准教授

高畑 悠子

(H25卒)

研究のきっかけ

きつかけにもなりました。

行政法の研究者を目指すきっかけは、東北大学公共政策大学院在学時におけるいくつかの気づきにあります。まずもって感じたのは、法の解釈を中心とする法学部での勉強がいわば過去から多くを学ぶものであるのに対し、公共政策大学院での学修は、これから「の公共政策を考え抜く」という点において、大きく異なっているということでした。しかしそれは、これまで触れてきた法解釈学は、法との向き合い方のひとつに過ぎないことを気づかせてくれるものでもあり、「まだよくわからないけれども、法学は実は奥深いものかもしれない」と感じる

きつかけにもなりました。そして、最大の契機は、政策の現場を垣間見る機会を得たことです。1年次の公共政策ワークショップは、7、8人前後のグループごとに、1年をかけて政策提言を完成させるもので、行政機関や民間事業者等に対し、ヒアリング調査を行い、現在の法制度が現場の第一線において、どのように運用され、どのような課題が生じているのかを明らかにすることから始まります。私は、地方自治に関するテーマを扱うグループに在籍していましたが、同時期に受講した「地方自治法」の授業が、目が覚めるように面白く感じたのです。正直にいえ

ば、学部の頃は、行政法というのはなんだか無味乾燥というか、つまらないというか、そもそも行政というものを経験してしまっていた節は否めません(当時の先生方には大変申し訳ないのですが。他方、あの藤田宙靖先生でさえ、同じようなことをおっしゃっている(同窓会報40号6頁)、あとから面白さに気づくということは、とりわけ行政法においてはままあるのかもしれない)。しかし、当事者の目線に立ちながら、法制度の問題の所在を明らかにしようとする営みは、アクチュアルな問題と実は密接な関係にある法理論、とりわけ行政法理論の面白さを痛感させるものにもなりました。行政実務が抱えるさまざまな政策課題に向き合いつつ、改めて法学を学ぶことによつて、両者は地続きであること、実務のためにこそ理論的基盤の構築は重要であることとを肌で感じ、行政法研究の面白さにのめりこんでいきます。

裁判過程から行政過程へ

博士課程では、フランスの越権訴訟(日本でいう取消訴訟)における取消判決の効力に焦点を当て、研究を進めました。博士論文をご覧になった先生から、「公共政策大学院から進学して、よくこんな(判決効という公共政策から縁遠い、マニアックな)テーマにしたね」とお声がけいただいたことがありましたが、私の中では先述の一つ目の気づきからつながるものでした。法解釈学と立法政策学の峻別ないし融和という点もさることながら、学部でさんざん学んだ判例つまり、裁判・訴訟の場面と公共政策の場面とが自分の中でどうにも整理できずにいたのです。両者の関係を解きほぐすひとつの手がかりとして、訴訟のあとの世界、つまり、裁判所が判決を出し、そのあとボールが行政過程に移るという局面に着目しました。少し補足しますと、行政法で学ぶ訴訟はさまざまあり、国家賠償法などが報道などでよく目にするもの

ですが、私が研究の対象としたのは、行政の処分に対する取消しを求める取消訴訟で、現在も重要な位置を占めています。わが国の行政法学がこれまで解明してきたのは、主に、どのような場合に、誰が、裁判所に取消しの訴えを提起できるのか、そしてどのような審理をすべきか、という点でした。ところが、行政訴訟は、民事訴訟や刑事訴訟とは異なり、権力分立原理のもと、裁判所が介入できる場面が限られています。そのため、訴訟が終結してもなお、根本的な問題は解決せず、再度行政による応答を必要とすることが少なくありません。それは、行政事件訴訟法33条1項が、取消判決は「行政庁その他の関係行政庁を拘束する」と規定していることから明らかです。しかし、この「拘束力」と呼ばれる取消判決の効力については、なぜこのような効力が認められるのか、具体的に行政にはどのような義務が生じるのか、そしてこの義務が果たされなかつ

た場合にいかに統制すべきかなどの論点については、必ずしも十分に検討されていませんでした。

視座としてのフランス法

そこで、このような問題意識のもと、フランス法研究を進めました。戦後の日本では、行政訴訟も民事訴訟の一部を構成していますが、フランスでは、行政権の一部として、行政訴訟を扱う行政裁判所が位置づけられ、司法裁判所とは別の組織と法理論を形成してきたという特徴があります。さらに歴史を遡ると、1872年以前は、行政裁判所と行政とは未分離の状態にあり、取消判決は行政権の最高機関である国家元首によって権威づけられてきたという時代さえありました。最高行政裁判所であるコンセイユ・デタ (Conseil d'Etat) の前身が、13世紀末に設置された国王諮問会議 (Conseil de Roi) であることもその証左といえます。コンセイユ・デタが裁判所としての地位を確立さ

せたのち、フランス法は、取消判決の判決を「適法性の原理 (principe de légalité)」という法概念により基礎づけ、ヨーロッパ法の荒波も受けながら、その実効性の担保に力を尽くしていくことになりました。ここでいう適法性の原理とは、行政は法のもとのみ活動することができるといいうシンプルな法原理ですが、これを堅固な武器として磨き上げ、人々の権利・自由を保護してきたことにフランス法の特徴を見出すこともできるでしょう。

立ち返って、フランス法を参照する意義はどこにあるのか。ひとつは、その歴史・経験の重みが挙げられます。行政法の母国といわれるフランスは、毎年、日本の数十倍の件数の行政訴訟が受理されており、長い歴史と浩瀚な公法学説によって培われた判例法理が存在します。上記の研究でも、判例の蓄積・学説による分析↓理論の精緻化という好循環がうかがえ、だからこそ、取消判決後の行政の行

為規範の具体化にも成功しているということが出来ます (翻って日本ではそもそも裁判例がほとんど存在しないことも大きな要因となり、議論が停滞していました)。

法意識や法制度等の異同を

慎重に考慮する限りにおいて、比較法研究という手法は、ものごとを相対化して客観的に見る態度を養うための有益なツールのひとつであるように思います。講義でも、これから話す内容は、「現在」の「日本」の行政法に係る理論・判例に過ぎず、「過去」や「他国」に目を転じれば、まったく別のロジックが存在していること、つまり、目の前にある条文や判例が絶対的に正しいというものではないことを伝えるようにしています。もちろん、相対化し、批判的に検討するためには、現在の法理論についてまずは理解していく必要がありますし、それが学部生の頃には大変なのですが、法とは、(勝手に降ってくるようなものではなく) その時々人間が試行錯誤のう

え生み出し、少しずつよりよいものへと変えていくものであるという視点は、法学の奥深さを教えてくれるように思っています。

行政訴訟における和解

その後も、フランス行政法における適法性の原理を考究すべく、角度を変えながら研究を続けていますが、最近のものとして、行政訴訟における和解をテーマにしたものがあります。

日本の行政訴訟では、国家賠償請求事案の例を除き、訴訟上の和解が用いられることはほとんど皆無です。しかし、原告が請求を取り下げ、行政との間で事実上の和解を行うという慣行は多く実践されています。このような裁判実務に対し、行政法学説は、行政訴訟における和解の可否について議論をし、否定的な見解が多数を形成していましたが、その理由付けや可能であるとした場合にどのような要件をクリアすればよいのかといった点に関する議論は進

んでおらず、2004年の行政事件訴訟法改正時にも和解の論点は棚上げとなり、有効な法理論・法制度の形成はなおも課題でした。

他方、フランスでは、

1807年法律を起点として訴訟上の和解が実装され、近年でも2016年法律による制度の整理があるなど、注目に値します。最も示唆的であったのは、和解に対する裁判官の関与のあり方です。フランス法は、訴訟当事者による合意形成の開始・終了を緩やかに認め、それらを支えるかたちでの裁判官の関与を拡大させつつある一方で、こうした和解の多用を前に、行政裁判官はそれを事後的に、審査する側面をも有しています。とりわけ、行政裁判官は、民事訴訟を担当する裁判官よりも厳格な態度で和解の実体的審査を行っており、それは、本来的に行為の自由を有する私人を拘束する法規範とは異なる公法特有の法規範の存在と、当該規範への適合は、当事者間の意思の合致に

よって免れうるものではないことを序実に示すものといえるでしょう。訴訟上の和解に位置づけ、裁判官を関与させることの意義は、和解の法的コントロールを可能とすることとあり、フランス法の実践は、日本法の今後の議論にも参考になる部分があるように思います。

これからに向けて

吉祥寺での暮らしも板についてきたころ、2024年4月から母校で教鞭をとる機会をいただき、仙台の学び舎に戻ってまいりました。ささやかな気づきから、研究者の道に進むことになり、法学の奥深さと厳しさを体感してきましたが、他方で、契機となった実務と理論の架橋については、研究をとつても、それに裏打ちされるべき教育をとつても、まだまだ未熟であることはいうまでもありません。しかし、これまでのわずかな研究の足跡を辿ると、政策実務から行政法理論への関心を喚起され、さらにそれは裁判

実務への関心へとつながるものであったともいえそうです。こうした折に、公共政策大学院、法科大学院という二つの専門職大学院を擁する東北大学大学院法学研究科の教員陣に加わらせていただいたという巡り合わせは、これからの研究者人生において、政策実務・裁判実務・行政法理論の架橋をも見据えた研究・教育をすべしとの啓示なのかもしれません。頼もしい同僚の先生方に助けていただきながら、少しずつ研究を進めていきたいと思っています。



法は政策課題にどう向き合うのか—— マンシオン問題を題材に



東北大学大学院法学研究科准教授
堀澤 明 生

(※本稿は、2024年7月31日に行われました、法学部オープンキャンパスの内容を簡略化したものです。)

1. はじめに——行政法学のイメージ

本日はお越し下さり、ありがとうございます。私は、行政法学という、行政と皆さんのような私人との関係について主に扱う一連の法律群をあつかう学問を専門としております。皆さんが朝起きて顔を洗うときに用いる水道や、今日乗られたであろうバスなど、多くの物事に行政はかかわっています。前者は水道法、後者は道路運送法という法律がかわります。このよ

うに、行政法は皆さんの生活に密接にかかわっています。

法学の仕事は、大きく二つ挙げられます。解釈論と立法論です。解釈論は、条文の意味があいまいなときに、どの意味が適切か決定するものです。具体的な事例を念頭に置いて、適切な解決を与えるために行うものです。もう一つの立法論は、既存の法律が十分でないときに、こうした法律を作るべきだ、と提案するものです。

行政法は、新しく生起する社会課題に対応するための手段として機能します。そのためには、現にある法律の解釈することだけでなく、新しい法律を構想することも必要で

す。

2. 法的議論の構造

法律は、ある一定の事実があらかじめ法律に定められた要件に該当すると、一定の義務を課したり、制裁を科したりすることによって、人々の行動に影響を与えます。例えば、皆さんも殺人罪(刑法199条)については聞いたことがあると思います。「人を殺した」という事実が該当することによって、「死刑又は無期若しくは五年以上の懲役」という刑罰が裁判所で科されるという威嚇をすること、人々が殺人をするのを思いとどまらせるし、違反したら実際に罰を科するという構造になっています。このように、法律が「Aに該当する事実があるときには、Bという効果を与える」というルールを定めていることを前提として、「aという事実があり、aはAに該当する」と述べることで、「Bという効果が生まれる」という議論をすることが、法律における基本的な議

論とされる法的三段論法の構造です。

比較的単純なことに聞こえると思いますが。ただし実際には、この「aがAに該当する」という部分がかなり難しく、裁判所はその判断を判例という形で積み重ねていきます。aという事実をどう評価するかということも難しいですし、Aの正確な意味を把握するために要素に分解していくと、意外とよくわからないのです。「人を殺す」も、例えば赤ん坊は「人」だとして、胎児は人なのか、のようにさまざまな悩ましい問題があります。

このような、微妙な事例が生じることにについて、不満を抱く人もいるかもしれません。難しい事例が発生するたび、その事例を簡単に解決できるような文言を付け加えていけばいいのではないか、どうしてあいまいな文言のまま法律は生き延びていくのかと思うでしょう。実際にそのような法改正もなされるべきなのですが、あいまいであるこ

とも一定の理由から許容されています。

まず、法改正自体がコストの高い行為です。法律を改正するのは社会に大きな影響を与える行為ですので、沢山の時間をかけて、改正する必要があるのか、その文言はこれまでの法律との間で整合が取れているのかなどをチェックしなければなりません。また、あいまいであること自体にもメリットがあります。将来生じる新しい問題について、解決をもたらす具体的な条文がないよりは、あいまいでもいいので裁判所で対処可能な条文を用意しておくという判断もあり得ます。

近年、AIに対する規制をどうするべきかなど、新しく、しかも将来何が起きるのかわからない社会問題が生じています。こうしたものに対して、どこまで国会が議論して法律として定め、どこまでを裁判所等の具体化にゆだねるのか、はたまた法律が枠をはめるだけで事業者らの自主的な判断に任せるかなどを、社

会が複雑化・加速化するとともに、ますます考えねばなりません。

3. 行政法の基本原理

ここまでは、国会が定めた法律を裁判所が適用するという状況を念頭にしてきました。しかし、一定の領域について専門性を有する官僚機構に、個別の場面での具体的な判断をゆだねるほうが良いことがあります。そのように行動する行政の基本的なルールとして、行政が皆さんの権利を制限したり義務を課したりするには、国会の定めた法律の根拠を必要とします。これは法律の留保と呼ばれる行政法の大原則です。

この営業停止命令は皆さんの公衆衛生を図るものですが、それでも、国会が定めた法律上の要件を満たしてのみ行うことができます。

4. 実効性確保の手段

さて、このような義務を課せられた私人は、多くの人は従いますが、そうでない人もいます。そこで、行政は何らかの形で義務を果たさせようとしています。このような、義務の実効性を確保する手段は、さまざまなものがあります。全部をお話しするのは難しいので、ここでは地方公共団体がしばしば用いるものをピックアップしてみましょう。代執行、罰則、公表などの手段があります。

代執行というのは、私人に課せられた義務を私人が実行しない場合に、行政が実力を行使して代わりに実現したあとに費用を徴収するというものです。行政代執行法という法律で根拠が与えられています。例えば、老朽化した建物について地方公共団体が「こ

の建物を除却しなさい」ということがあります。このような義務について、命令された側が実行しないならば、行政が代わりに除却を行ってしまい、後で費用を徴収します。この代執行は、しかし、義務を課せられた私人がお金を持っていないならば、無い袖は振れませんので、地方公共団体自身の費用で行ってしまうこととなります。つまりはその地方公共団体の住民たちがひろく負担することになります。

次に、罰則は、さきほど見たような刑罰を科すことです。様々な義務に対応できますし、地方公共団体自身が条例という、法律によく似た形式で罰則を定めることができます。しかし、警察や検察は人員が限られていますので、かならずしもこの罰則が発動できるとは限りません。

最後に、公表は、「義務を課したのに従ってくれない」等の事実を人々に周知するものです。公表の目的は義務の実効性確保では必ずしもないこ

とも多いのですが、命令された人は公表されるのを嫌がつて従ってくれるかもしれない。近年の地方公共団体は公表の制度を活用しようとする傾向にあります。ただ、公表した事実を知った市民がどのように受け止めて行動するかは、予測がつかないことがあります、慎重に使うべきです。

5. マンション問題と行政政策

このような武器を念頭に置きつつ、近年のマンション問題を考えてみましょう。現在、マンションには全国的にたくさんの方が居住しています。分譲マンションは、法的には「区分所有権」という特殊な権利で所有されています。物に対しては、1人が所有権を有するのが原則であり、この例外として共有が認められます。共有している物については、建て替えたり壊したりするような重大な決定をする場合には、全員一致が求められます。ところが、マンションを建て替える

ときに、1人でも反対すると建替えられないとすれば、他の区分所有者の権利が害されます。このため、現在の区分所有法とそれに付随する法律は、重要な決定を5分の4の多数決としています。

近年、マンションを巡り地方公共団体を悩ませている問題として、建物の老朽化、住民の高齢化という「二つの老い」があります。建物が老朽化して外壁が崩落するなどして周辺に迷惑をかけるかもしれないのに、リノベーションしたり建替えたりすることなく中にいる人々が「住みつぶす」ことを選択してしまうと、適切な対処が取れなくなり、周辺に迷惑をかけます。行政が介入しようにも、住民に相続が生じてしまうと、さらに行政としては誰に命令をすればいいのかかわからないという状態すら生じます。これを防がねばなりません。

では、適切な管理をしないマンションに対して、適切な管理をさせたい場合に、

どのように実現すればいいでしょうか。これを先ほど見た三つの実現方法のそれぞれがうまくいくか考えてみましょう。

まず、除却を命じて代執行するとすると、マンションが対象の場合には費用が高額になりがちです。本来に必要な場合には躊躇してはなりません、費用を徴収できないと最終的には住民の負担となってしまう。また、住民の行方が知れないと、義務を課そうにも空振りしてしまいかねません。

次に、管理をきちんとしていないといつて、人の意思決定に影響を与えるくらいの罰金を科すとなると、むしろマンションの管理費用に影響を与えてしまい、かえってマンションの荒廃が進むかもしれません。

最後に、管理をしていないことを公表するのはどうでしょうか。「ここは不適正な管理をしているマンションですよ」という情報を広めると、マンションの市場価値に

影響を与えてしまいます。すると、区分所有者らは「売ることができないので住みつぶすしかない」という判断に流れるかもしれません。

なかなかいい手段が見つかりませんが、逆に言えばそうなのは、こうなる前に区分所有者らが管理についてやる気のあるうちに行政が介入して、やる気がある状態を維持するのがよさそうです。現在の地方公共団体は、マンション管理士をマンションに派遣したり、マンション分譲時の管理体制がきちんとした計画になっているかをチェックしたりしようとしています。

6. おわりに

行政法は、社会の課題に対処するための重要な手段であり、適切な制度設計が求められます。特に、マンション問題のように多くの利害関係者が関与する場合には、さまざまな関係者の利害を上手に法文に落とし込む必要があります。今後も、法学の知見を活かしながら、他の学問領域と協力し、より良い社会の実現

に向けた法制度のあり方を模索することが求められています。



中川先生50年忌によせて



法学部同窓会事務局長

清水 廣行

(S39卒)

中川善之助先生が亡くなられて50年です。現役学生や若手の皆様にはあまりなじみがないかと思いますが、先生は東北帝国大学法学部スタート時から昭和36年の退官まで、東北大学一筋で民法―特に親族・相続法のいわゆる身分法学研究を中心とする生涯でした。新制法学部の初代法学部長でもありました。

東京・京都に次いで仙台の東北帝国大学に法学部が設置されたのは大正11(1922)年で、開設にあたり京都帝国大学法学部の佐藤丑次郎教授(憲法学)が創設委員に任命され、中川先生はその教授陣容の第1号として民法学助教授に任命されました。法学部には法学14、経

済6、文学24の合計44の講座が設けられ、ここに勝本正晃(民法学)・石田文次郎(民法学)・小町谷操三(商法学)・河村又介(国家原論)・石崎政一郎(社会法論)・田岡良一(国際法学)・廣浜嘉雄(法理学)・阿部次郎(美学)・小宮豊隆(独文学)・土居光知(英文学)・岡崎義恵(国文学)・村岡典嗣(文化史学)・宇井伯寿(インド哲学)・堀経夫(経済学史)・和田佐一郎(経済学)・中村善太郎(西洋史)など若手の俊英が教授陣として招かれました。これが現在の法学部・経済学部・文学部のルーツとなります。

中川先生は民法、とりわけ親族・相続の家族法の第一人者として活躍する傍ら、昭

和初期から丹念に地方の現状を調査していました。昭和13年・14年には法制度を超えて民俗学の分野にも及ぶ南洋諸島(ミクロネシア)の実態調査を続けておられました。太平洋戦争下の空襲で資料を焼失したのは残念なことでした。その後も全国各地を回られた成果が「民法風土記・法の現場を歩く」(講談社学術文庫)として残されています。昨年亡くなった松岡正剛は「松岡正剛千夜千冊」の中で、先生を「書齋法学ではなくて歩く法学者」として「中川善之助。この名を知らない日本人はいまそうとう多いだろうが、それはまずい。」と記しています。

現在も続く、無料法律相談所を開設したのは昭和3年でした。ご自身で「いちばん一生懸命になって、いちばん熱心に、いちばんながく続けた仕事は、東北大学教授であることのつぎには、法律相談所長である」と述べておられます。戦後は内閣の臨時法制調査会委員や司法省の司法

法制審議会委員を務め、我妻栄とともに戦後民法改正にも尽力し、中川身分法学は学界の大きな山脈でした。最高裁に招かれた際には電報で「ダイガクサリガタシ」、京大に招かれた際には「東北を離れず」と断り3年程講師としての講義をされつつ、本拠地仙台での研究・生活を楽しみました。退官後東京に居を移し、学習院大学教授や金沢大学長を経て、法制審議会民法部会長等の公職についていました。昭和50年3月20日上野駅にて狭心症のため急逝されました。享年77歳、前年11月に門弟が集まって喜寿のお祝いをしたばかりでした。

また、先生は各地へ出かけた際に積極的に同窓生に声をかけ同窓生の組織化に心を砕かれ、北海道・福島・名古屋・大阪など現在の同窓会組織化の先鞭をつけられました。空襲で焼け野原となり下宿先にも難儀していた学生たちのために「沖和寮」を自費で開設し定年時まで続けて、それを徳とした寮生を中に鎌倉で「沖和の集い」が数年前まで続き、私も数回参加させてもらいました。今も川内南キャンパスで毎年桜の花を咲かせている中善並木は、直接授業での訾咳に接しえなかった学生達(35J)との「法一亭」(先生が大学祭模擬焼鳥店の亭主を引受けた)を通じての「若き日の友情と感激のために」の記念で生まれたもので、その経緯は川内萩ホール駐車場入り口わきの中川先生直筆の石碑の傍らの林屋禮二名誉教授撰文の説明板に記されています。退官された先生と直接授業でまみえたことのない法学部生有志が8回にわたり引き継いで仙台から東京まで先生を訪ねて徒歩旅行を続け、その仲間

は年代を超えて今でも「中善はぎの会」として東福寺に眠る先生の墓前に集まっています。

関連記事として会報3号三原一正、35号38号堀口正明、37号月原茂浩、40号川口雄の皆様の寄稿を合わせてご覧ください。

温故知新

十年ひと昔

東北大学名誉教授

柳 父 園 近 (故人)

藤田宙靖学部長の後に、まさかと思っていた学部長職を1996年4月から2年間務めることになり慌てました。しかし、「十年ひと昔」で、その後の「大学院改革」と「法人化」の急激な展開を経た今日と比べると、まさに「昔話」の世界です。

当時は、国立大学の「大学院重点化」という方向に向けた「大学改革」が、全国の国立大学を巻き込みつつありました。それは学部教育よりも大学院に重点を移そうという形で「大学改革」の提案でした。その方向で人員構成、施設等の再編を進めて行こうというものでした。略して「重点化」と言われていました。このような「大学院重点化」をめざすポリシーは、もともととは理系的な発想から生じた

ものだったと思われます。医学部、工学部などの「理系」学部の学生には、卒業後も少なくとも修士課程には進学する傾向が以前から強く、また、わが国の科学技術と生産性の一層の向上のためには大学院をもっと重視する必要があるとの声も高まっていたからです。しかし「文系」とりわけ法学部という学部では、概してどの大学にあっても、当初は必ずしも「重点化」にはそれほど積極的ではなかったと思います。ともあれ、こうした時流の中で法学部のあり方をめぐって、全国的な模索が当時始まっていました。

東北大学法学部は、相当慎重であり、むしろ学部教育の充実を図ることこそが必要かつ有効なのではないかという見解でした。この議論はこの時急に生じたものではありません。法学・政治学のカリキュラムは4年間では消化不良に終わっているのではないかという危惧はある。しかし法学部卒業生がその社会的能力を発揮するのに、研究者養成の大学院に進むことは必要でない。東北大に限らず法学部大学院修了者への社会的「重要」も大きくはない。むしろ学部の5年制化を考えるべきではないか、という議論が川内であらためて高まりました。「重点化問題」をめぐって国立九大学法学部の緊急シンポジウムが2回にわたり開催され、教授会の意向を踏まえて私は上記のような考え方を報告しました。これには一定の共感も示されましたが、しかし大学内外の大勢に押されて他大学の場合は急速に重点化に傾いてゆくようでした。「重点化」圧力の中で、しかし本当に妥当な方針を見定めることがいよいよ緊要となり、「結論を先取りすることなく」という条件のもとに13年ぶりの「将来構想検討委員

会」が教授会に設置されました。しかしその後「法科大学院」の設置問題が急浮上し、全国的に法学部の軌道が切り替わることになりました。そうなると東北大学法学部はあらためて大西仁学部長のリーダーシップのもとに、俊敏に法科大学院と行政大学院の設置という大きな課題の実現にたち向かうことになりました。「法人化」問題が迫ってくるのは、さらにそのあとで

す。しかし、このように振り返りますと、東北大学法学部がたどった「改革」のこうした経緯には、やはり「らしさ」が出ていたといえるように思われます。

柳父名誉教授は昭和62年から平成21年まで本学政治学史講座を担当され、平成8年9年第23代法学部長を務められました。本稿は「同窓会50周年記念誌」に寄せられたものです。



会員だより

三菱樹脂事件・高野達男さんの裁判記録

池上 武（S39卒）

三菱樹脂事件といえは試用期間中の誠首の是非をめぐる裁判として有名です。

生協におられた時にともに働きました。

論が強かったようです。差し戻し審では外尾健一教授（当時）も高野さんの証人として出廷。安保闘争は法学部教授会が全員一致で安保法の強行採決に反対したこと、東北大学も生協を大学の生活部として位置付けていたこと、などを証言しました。これが両者の和解合意につながったと思います。

高野達男さんは東北大学法学部を昭和38年（1963年）に卒業して、三菱樹脂に入社。3か月の試用期間中、2か月半の時に採用取り消しを言い渡されました。理由は「学生時代に学生運動をしていたこと、生協の仕事をしていたことを隠していたこと、それらは幹部社員になる資格に欠ける」と言うもの。高野さんは解雇反対運動に取り組み、13年間の闘いののち、現職に復帰、最後は子会社のトップまで上り詰め64歳まで勤めました。入社同期の中年で、一番最後まで働いたことになりました。私は高野さんが

裁判では1964年東京地裁地位仮処分、1967年本裁判東京地裁、1968年東京高裁と勝利しましたが、1970年最高裁が小法廷から大法廷に移し、1973年最高裁大法廷は「破棄差戻」判決となりました。高野さんは不利な立場に立たされました。この差戻しには宮澤俊儀東京大学名誉教授の「憲法は原則として企業の自由を保障しており、労働者の採用の際、その政治的意見の開陳を求め、採否を決める自由がある」との検察側意見書が大きな影響を持ったといわれますが、その当時からこの意見書の主張には学界内でも反対

高野さんは1976年に現職復帰、13年のブランクを乗り越えて営業の一線で働きました。

高野さんは退職後故郷の宮城県川崎町で農業をやることを決意、移住して間もなくの7月に脳梗塞で亡くなりました。

裁判記録は奥さんと我々後輩が整理し、2011年東北大学法政資料室に保管されることになりました。現在も別館6階の文献資料コーナーのキャビネット一角の4尺2段に収まっています。

仙台弁護士会の弁護士の話では、三菱樹脂事件の判例は今も労働事件の裁判で使われ

ているとのことでした。

（事務局補注）この事件に関しては、一昨本年学裁判記録に収められている宮沢意見書を閲覧した信濃毎日新聞社の渡辺秀樹編集

委員が、御遺族とのインタビューを交えた裁判経過ルポルタージュを、今年4月に岩波書店から発行された「憲法事件を歩く―尊厳をかけて戦った人々と司法―」の中に取り上げています。

世界に貢献、地域に還元 ―共創戦略奮闘記―

東北大学共創戦略センター客員特任教授・前特任教授

成田 美子（S59卒）

100年に一度といわれるパンデミックに世界中が戦々恐々としていた2020年3月、宮城県を定年退職し、同年4月、総長が片平本部に新設した共創戦略センターの特任教授になった。県庁では「いつまでもあると思うな、親と天下り」などと嘯いてきたので、天下りを選ばず、母校の教授やスタートアップと連携してきた仕事を継続したいと考えた。経産省からの「追っかけ」やフィリップス社のR&D誘致など

の実績を見ていくくださったようだ。20年度から22年度までは全国の大学で初めて設置された「ETROイノベーションスクも兼務し、欧米の海外企業と本学の研究者やスタートアップとのマッチングを行い、共同研究、海外展開、R&D（研究開発拠点）のサイエンスパークへの誘致につながるのが主な仕事だった。具体的には、ドイツ最大州のNRW（ノ르트ラインヴェストファーレン）州貿易投資振興公社とのウェビナー開



バイデン地盤の米国デラウェア州政府来学



ドイツでの商談会



元気になった葵ちゃん

催や JETRO と連携した全国最多となるマッチング、総長、病院長、宮城県知事出演の海外企業向け動画制作、イスラエル大使館との共催によるスタートアップ支援プログラム（8 か月）などを行ったほか、依頼に応じて本学留学生や海外大学院（インドの経営大学院）、法学部生への講義も行った。23 年度から24 年度にかけては EU のイノベーション会議や国際展示会、メディアを通して本学をアピールするとともに県や市など地元自治体の外資誘致活動にコミットしたほか、留学生による海外同窓会の拠点形成、国内外のステークホルダーの開拓支援などを行った。具体的には、日本政府がウクライナに供与している世界最先端の地雷除去機器を開発した本学教授をサポートし、培ってきた人脈を使って NHK や EU 等と連携し現地入りにつなげた。NATO の「平和と安全のためのプログラム」に参加していたことから軍事支援とみなされることもあったが総

長表彰により、当センター長だった現総長から軍事支援でないことを大学としてオーソライズしてもらった。また、23 年は県職員時代から支援してきたスタートアップが大きく成長した時期でもある。難関の米国 CES（世界最大規模のテックトレードショー）で受賞、現地入りした西村経産大臣が駆け付け同年5月の G7 仙台科学技術大臣会合で紹介された。同じく薬学部准教授のスタートアップは国家プロジェクトに採択され、100 億円までの投資を得ることが可能になった。一方、三菱UFJ 銀行や読売新聞社とブレインストーミングを実施してきたことから、同行によるナノテラスへの1億円の寄付や、本学を優先的に記事掲載してもらったための同社との協定につなげた。24 年6月にはスタートアップの CEO からこれまでの恩返しとして、台湾の TSMC 社を含めた傘下の半導体20社が来学、次世代放射光施設ナノテラスやノーベル賞候補者を生み出

しているナノ・スピコン実験施設、半導体センター等の視察と意見交換、知事表敬などをコーディネートした。また、経済学部生や自治体職員への海外ビジネス勉強会を実施したほか時事通信社情報専門誌「地方行政」の依頼により「稼ぐ自治体への国際戦略」（連載12回）を寄稿した。24 年11月、母校は東大、京大を抜いて日本で唯一の「国際卓越研究大学」に認定された。世界トップクラスの研究開発を目指すもので、毎年100 億円を最大25 年間国から支援される。1907 年、東北帝大が政府の財政難から古河財閥（富士通の源流）と自治体（宮城県）の寄付により国費無しで創設されたことを思うと隔世の感がある。（学びの杜21「創立と100 周年」より）全国に散った同窓生から続々おめでとうのメールが来てうれしかった。余談だが、同窓会の持つ驚異的な力を感じる忘れえぬ出来事もあった。米国でしかできない心臓移植が必要なお子さんを持つ他学部

の同窓生夫婦から募金活動についての協力を頼まれたのである。人脈を活用してメディア、記者などに紹介、報道してもらいながら全学・法学部の同窓会や先輩を通して多くの協力者を得た。途中で円安が進み、当初3億円台だった費用が5億円台になったにもかかわらず1か月足らずで目標額に達したのである。昨年4月に元気なお子さんが来学したときには涙が出た。共創戦略に話を戻す。国際という

海外という大海原では大きな獲物を狙うことができる。今や国家間だけでなくリージョナルな地域と地域との連携により大きなディールを引き出す時代である。世界的な研究シーズによって生みだされたお金で福祉、教育に回す、これが健全な発展というものだと私は考える。奪い合い削るばかりでなく豊かな財政を生み出すこと。大学が創造するのは新しい価値の活用によって地元還元する。それができるのは世界にコミットできる大学であり、母校であることに敬意と誇りを感じている。



法律とマーケティング

早川 理 (H27卒)

地域活性化とマーケットとしての「使命」

私は平成3年、神戸の東灘区に生まれた。震災で阪神高速が横倒しになった現場のすぐ近くである。当時、家の向いの灘高校での避難所生活で、両親と祖父母から自衛隊やボランティアの方々に随分お世話になったと聞いた。そうした経緯もあり、機会があれば私も何かしたいとずっと思っていた。

そんな中、縁あって東北大学法学部に入學。大学1年生の春休みに東日本大震災に遭遇した。20年ほどの人生で2度目の大震災。GWまで延長された春休みを持て余していたこともあり、山元町でのボランティアに毎日参加した。不謹慎かもしれないが、ボランティアはやりがいも多く、非常に充実していた。ビニールハウスの片づけに交通整

理、写真洗浄も行った。しかし同時に、個人的な支援の限界も痛感した。現地で精を出して泥をかけば感謝され、それで一日が終わる。しかし被災者の方々は、目の前の厳しい現実が終わりなく続いていくのである。家も家族も仕事も、すべて波にさらわれて。そんな人々の前にちっぽけな自分が派遣されたとして、いったい何ができるのか、深く考えさせられた。

時は流れ卒業後、法律とあまり関係のないマーケティングの世界に身を置くことになった。日々の仕事に忙殺され、震災当時の無力感を忘れかけていた頃。コンサルファームから宮城のとある水産業者に身を投じた同級生の記事を見た。彼は新規販路の拡大・新製品の開発とブランディングを成功させることで、地域経済を活性化させ、

雇用を生み出していた（なお現在、彼は同社の代表取締役となっている）。本当に必要なものはこれだったのかもしれない。私は深く感銘を受けた。

阪神・淡路大震災と東日本大震災、二つの震災を経て、神戸も東北も表向きは復興したように見える。が、どちらもマクロな意味での「復興」に力をとられたあまり、ミクロな意味での地域発展ができていない。神戸も街の復興はできたが産業構造の変化についていけず、人口減少・経済活動縮小という側面では100万都市の中で一人負けといった状況だ。東北太平洋沿岸もがれきは綺麗に片づけられ、目に見える震災の爪痕は一部地域を除きほぼなくなっている。しかし依然として人口流出は止まらず、復興支援の名目で投じられた巨額の資金は地元の産業に根付くことなく、他地域へ流出してしまっている。

神戸や東北だけの問題ではない。今や自然災害は日本中

で毎年起きている。西日本や九州の豪雨災害・熊本や能登の大地震など挙げればきりが無い。南海トラフ地震も今後かなり高い確率で発生すると言われている。そうして災害が起きるたび、表面上きれいになるだけで経済活性化・雇用創生といった面が置き去りにされ、少しずつ日本の国力が削がれていくのではないかと懸念している。

地方の産業興隆なくして、本場の被災地復興・地方創生はありえない。言うまでもなく、日本の会社の99・7%が中小企業であり、中小企業を元気にすることが日本を元気にすることに直結すると感じている。しかしそうした企業の多くは、優れた製品やサービスをもちながらも、販売力不足によって経営難に陥っている。本来、良い商品をきちんとブランドイングリ販売路拡大すれば、彼の企業のように事業拡大が望めるのである。マーケットとしてこの課題に向き合おうことに、私は強い使命感を感じた。



「ボッチャ」というスポーツについて

東北大学公共空間ボッチャプロジェクトD&I
菅 原 大 翔（公共政策大学院2年）

DIBOプロジェクト

私たち「東北大学公共空間ボッチャプロジェクトD&I（略称：DIBO）」は、東北大学公共政策大学院の研究をきっかけに、2022年に設立された団体です。

メンバーは東北大学の大学院生と学部生で構成されており、私たちは、ユニバーサルスポーツであるボッチャを公共空間で行うことを通じて、多様性を尊重し、性別や年齢、国籍、障害の有無などに問わず誰もが暮らしやすい共生社会の実現を目指しています。今回はわれわれが活動している「ボッチャ」というスポーツについて執筆させていただきます。

ボッチャとは

ボッチャとは、重度脳性麻痺者や、四肢重度機能障害者

のために、ヨーロッパで考案されたユニバーサルスポーツです。ジャックボールと呼ばれる白い目標球に、赤と青のボールを投げ、いかに近づけるかを競います。

1988年のソウルパラリンピック大会よりパラリンピック正式競技として採用されており、2021年に開催された東京2020パラリンピック大会では金メダル、2024年のパリパラリンピックでは銅メダルを獲得するなど、近年注目度が高まってきています。

ボッチャの進め方（一般社団法人日本ボッチャ協会HPより引用）

①先攻（赤球）がジャックボールを投げて試合スタート
まずは先攻がジャックボール（白球）を投球します。

ジャックボール投球後、続いてジャックボール投球者が連続して自ボール（赤球）を投球します。ジャックボールが無効エリアに入ってしまった場合は無効となり、相手がジャックボールを投げる権利を得ます。

②後攻（青球）が続いて投球
後攻が自ボール（青球）を投球します。チーム戦、ペア戦の場合は投球順は任意となります。

③ジャックボール、先攻（赤球）、後攻（青球）の3球が揃ったタイミングで一度計測

3種類のボールが揃ったタイミングで一度計測を行い、ジャックボールから遠い距離にある方が次に投球を行います。

④制限時間内に両者6球ずつ投球

各クラス6球投球するまでの制限時間が定められ、制限時間内に、両者6球ずつ投球を行なっていきます。制限時間を過ぎてしまうとボール

が残っていても無効となります。

⑤得点の計測

すべての球を投げ終えた時点でジャックボールに自ボールを最も近づけた選手（チーム）が勝ちになります。負けている選手（チーム）のボールよりジャックボールに近い球数が点数となります。

ポッチャの面白みについて

ポッチャは、単に力を使うだけではなく、戦略が非常に重要なスポーツです。相手のボールをはじき飛ばしたり、ジャックボールの位置を変えたりと、状況に応じた柔軟な判断が勝敗を分けます。また、ボールの投げ方や転がす角度、力加減の微調整など、技術的なスキルも重要であり、日々の練習がかかせません。

DIBOが特に力を入れているのが、街なかなどの公共空間でポッチャ体験をしながら、多様な人が交流し、理解を深め合える機会を増やすこ

とです。私たちDIBOはこれまでに、公共施設や市民活動団体からの依頼を受け、ポッチャ体験会を開催してきました。ポッチャは、年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、すべての人が一緒に楽しめるユニバーサルスポーツであり、私たちDIBOは、そんなポッチャを楽しむことを通じ、誰もが生きやすい社会を目指しています。

DIBOでは、体験会の開催依頼を受け付けています。興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、以下のHPよりご依頼お待ちしております。

東北大学公共空間ポッチャプロジェクトD&I ホームページ

<https://sites.google.com/view/dibo-boccia/>



「虎に翼」チルドレンの歩んで来た道と未来へのメッセージー東北芝蘭会講演会

1. 経過

東北芝蘭会（とうほくしらんかい）は、東北地方在住の法学部女性同窓会員OG会で、その沿革等は会報前号でご紹介したとおりです。令和6年度は、前年に全学女子校友会として発足した紫蘭会（しらんかい）が初イベントを開催するに当たり本会に協力要請があり、双方の役員で協議の結果、メインとなる講演会を東北芝蘭会が、交流会を紫蘭会がそれぞれ担当することになりました。

2. 講演会

かつて法学第一教室・第二教室のあった場所に建てられた文科系総合講義棟の大講義室を会場に、佐藤絵里さん（法・平成13）と坂本実可子さん（経・平成23）の司会で、東京丸の内法律事務所を経営

諸星 久美子（H2卒）

する中里紀沙子さん（法・昭和60）と、仙台弁護士会初の女性会長となった藤田祐子さん（法・平成8）がゲストスピーカーに、お二人を熟知する当会の成田美子会長（法・昭和59）がコーディネーターとなり進められました。

【1】中里さんの講演

①三宅島阿古の出身で、昭和58（1983）年の三宅島の噴火で実家が焼失しました。一人娘で両親に愛されて育ち、高校から東京都内に進学、高校・大学とも担任の先生に勧められて進学先を決め、東北大学入学後は、茶道部でひたすらお茶を点て、就職活動の時期には、リクルースタイルが嫌いだったこと、「中里は司法試験受けなの？」と友達から聞かれたことをきっかけに弁護士

を志し、約10年後、平成7（1995）年に東京弁護士会に登録しました。

②ある時、弁護士が留学する話を聞き、平成18（2006）年から1年間、45歳で南カルフォルニア大学のロースクールLLMコースに留学。高校・大学の選択とは異なり、留学は自分が決めた道でした。翌年帰国すると、司法試験改革もあって若い弁護士が増えており、そこで、「二人で弁護士事務所を始めよう！」と人生最大の決心をし、同21（2009）年に47歳で「丸の内ソレイユ法律事務所」を開設しました。事務所の離婚専門ホームページが評判となってメディア出演等が増え、現在は弁護士19人、スタッフ19人の事務所となっています。

③この20年間に注力したのは、弁護士としての受任力や業務処理力等のスキルアップ、特に事案解決力では、依頼者の離婚後の生活を描くこと、支援する側の抽斗を沢山つくることでした。

④残りの人生で何をするか？事務所をスタッフに任せて65歳でリタイアし、アメリカ進出も選択肢に。人より遅いスタートでしたが、何歳になっても思い立ったら吉日です。

(2)【藤田さんの講演】

①弁護士を志望した経緯
どうすれば自由でいられるか、法学者で仕事が自由な父と弁護士でも忙しい母は放任主義でしたが、旅行などイベントを大切にしていた。三人姉弟の「真ん中」だったことも、干渉されたくなく、あまり協調性のない自分には有難かったです。高校生・大学生の時代は、アルバイトと原付・自動二輪・普通免許と、お金と足という自立手段を徐々に獲得し、同時に交友関係は整理から広がりへと移行し、楽しい学生生活を過ごしました。進路選択で司法試験挑戦を決めたのは、資格が非常に魅力的で、また、就職活動やリクルートスタイルもいざだったからで、親から言われたことはありません。

ん。母が求めた自由は、やりたいことを制限されない自由でしたが、私の場合は、やりたくないことを強要されない自由でした。

②弁護士としての仕事
うべき相手は最終的には常に自分。単身生活への憧れから選んだ横浜での司法修習を通じ、当事者が初めに話を待ち込む先であり、最初から共感して関わるので弁護士を選択しました。5年後に仙台弁護士会に移り、母との協働となりましたが、意外にスムーズに行きました。家事・刑事・少年事件が激増し、仕事の辛さや無力感を感じることもありました。プライベートでは賃貸マンションで一人と一匹(猫)で暮らし、旅と本と酒などを楽しんでいます。訪れた国は66カ国になりました。

のハードルが低くなると思っています。

3. トークセッション

中里さんと同期入学で、藤田さんを子供のころから知る成田会長がコーディネーターとして、女性弁護士としての苦楽や後輩への助言などの話を引き出しました。後輩への一言として、藤田さんから

は、「法曹の仕事は法律を意識すること、誰でも何時からでも、若いうちからでなくても挑戦できる」と、中里さんからは、「男性弁護士は若いうちに懸命に働き40代で事務所を開設しても、次の目標を定めしづらいうように見受けられるが、女性弁護士は40歳ころまで子育てに忙しく、キャリア

アプランを描きにくい反面、余計なしがらみがなく何でもできる自由がある」との前向きな発言で締めくくられました。

(文責 東北芝蘭会幹事 諸星)



東北大学女子校友会「紫蘭会」交流会

共催 法学部女子同窓会「東北芝蘭会」

【プログラム】

第一部 講演会・トークセッション 14:00~15:30
 テーマ 「虎に翼」チルトレインの歩んで来た道と未来へのメッセージ
 東京、仙台それぞれで活躍する女性弁護士のキャリア、仕事を通した悩み、喜びを語っていただきます。

第二部 交流会 15:30~16:30
 会費 1,000円〈当日会場にて徴収〉

ゲスト



丸の内ソレイユ法律事務所代表
中里妃沙子さん



仙台弁護士会会長
藤田祐子さん

コメンタリー



東北大学共創戦略センター特任教授
成田美子さん

●開催日時
10月26日(土)
 14:00~16:30

●会場
 東北大学川内南キャンパス文科系総合講義棟2階第2講義室

●アクセス
 地下鉄東西線
 国際センター駅・川内駅

お申込・問合せ 東北大学校友会事務局 下記HP参照
<https://shuyukai-tohoku-u.net/2024/08/06/news20240806-2/>

本部だより

「令和6年度収支決算（案）」と「令和7年度予算（案）」

単位：円

★収入の部

(▲) は収入の減少

項 目	令和6年度予算	同左決算	予算対比	令和7年度予算
1) 会費等	5,170,000	5,067,000	▲ 103,000	5,300,000 (年会費・一般会員および新入生会員)
2) 利 息	193	6,572	6,379	6,605 (実績勘案)
3) 広告料	0	0	0	
4) 雑収入・その他	32,000	160,940	128,940	20,000 (寄附金等)
5) 桜基金	50,000	0	▲ 50,000	
合 計	5,252,193	5,234,512	-17,681	5,326,605

★支出の部

(▲) は支出の減少

項 目	令和6年度予算	同左決算	予算対比	令和7年度予算
1) 会費等	140,000	134,680	▲ 5,320	150,000 (平年並み)
2) 事業費 (会報発行ほか)	880,000	824,205	▲ 55,795	885,000 (会報作製費・賛助金等)
3) 事務費 (旅費・人件費ほか)	3,625,000	3,508,760	▲ 116,240	3,595,000 (旅費・データ管理費・コンビニ手数料)
4) 通信費 (郵送料ほか)	355,000	335,760	▲ 19,240	390,000 (会報郵送料) 2,000 (切手代)
5) 振替手数料	130,000	140,601	10,601	160,000 (実績勘案)
6) 桜基金	0	0	0	
合 計	5,130,000	4,944,006	▲ 185,994	5,182,000

★収支差額の部

項 目	令和6年度予算	同左決算	予算対比	令和7年度予算
1) 収支差益	122,193	290,506	168,313	144,605
2) 前期繰越金	29,968,486	30,621,701	653,215	30,912,207
3) 次期繰越金	30,090,679	30,912,207	821,528	31,056,812 (見込み)

(1) 令和6年度収支決算（案）と令和7年度予算（案）

1. 順調な会費納入と活発な活動 一時的な消耗品の増額

令和6年度の予算は、PCの買い換えと、封筒、ゆうちょ振込用紙の作成が重なって、例年になく支出を含んでいたため、収支残を多く期待できないものとなっておりました。しかし、予定していた事項が一部実行されなかったことと、会費がほぼ予算通りの金額を確保することができたことによって、予算を大幅に上回る約29万円の収支残を確保することができました。

会費納入にご協力頂きました会員の皆さまには心より御礼申し上げます。

なお、「卒業修了祝賀会」に対して、昨年度に続いて多額の支援（賛助金）を行いました。参加者が大幅に増加するなど、卒業生に対して同窓会を大いにアピールできたものと考えており、大学側の要請に応える意味でも、今後支援を継続して参りたいと思います。

2. 令和7年度予算について

本年度は新たに同窓会役員の出張旅費日当に関する「同窓会旅費規程」を制定することにし、理事会の正式決定を得る予定です。制定の要点は、平成元年から大学の旅費規程を参考に運用されてきた旅費日当支給を規定化すること、及びそれに永らく据え置かれていた「宿泊費」の改定（高騰への対応）にありますので、何卒ご理解

を賜りますようお願いいたします。また、本年度は郵便代の値上げや会報の紙代の値上げなども考慮せざるをえません。

このような状況もあって、令和7年度の予算は、支出が昨年度実績を上回り、収支が拮抗する予算となっております。

会員の皆さまには厳しい環境の中ではありますが、収支基盤強化に向けて、昨年度と変わらぬ会費のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

(2) 令和7年度行事予定

最新情報は同窓会 HP にて更新掲載していますのでこちらもチェックください

令和7年		8月22日	北海道支部総会
4月12日	法祭大	9月6日	新潟支部総会
5月9日	第1回運営委員会	9月26日	第2回運営委員会
5月16日	東海支部総会	10月18日	大阪支部総会
5月30日	監査会	10月31日	福島支部総会
5月31日	会報第52号発行	11月xx日	宮城支部役員幹事懇談会
6月11日	学術振興基金ヒアリング	令和8年	
6月14日	広島支部総会	1月30日	第3回運営委員会
6月21日	理事会	3月25日	学位記授与式・卒業祝賀会
7月5日	東京支部総会	開催日時未定	秋田支部総会・青森支部総会・山形支部総会・東北芝蘭会・法科大学院部会総会・公共政策大学院部会総会
7月11日	本部総会及び宮城支部総会		
7月25日	岩手支部総会		

(3) 学術振興基金（理事長：蘆立教授）

同窓会学術振興基金は2001（平成13）年から同窓生の寄付金を原資に、法学部の自主ゼミ活動運営資金の助成を行っています。昨年から新たに裁判制度研究会が加わり合計8グループへの助成を行いました。これにより無料法相は48件の相談をこなし花巻市での出張相談を実施しました。模擬裁は11月23・24日川内萩ホールで「闇バイト」をテーマとした公演「上澄」を行い420名の方々に来場いただきました。法社研は依存症及び地方自治行政問題を扱った研究紀要「轍」を作成、倶楽部国際法は7月の夏大会で総合3位でしたが個人弁論では上位を独占し最優秀弁論者として野口代表が外務大臣杯を獲得しました。Negoisticは12月の大学対抗交渉コンペティションに参加、公政研は通常活動に加えて同窓の枝野幸男議員（S62卒）を招いての講演会及び在学生との討論会を行いました。「裁制研」では判例資料の整備を行いました。「東北法学」は紀要第59号を発行しました。

(4) 同窓会との連絡

- ・ 諸連絡・お問い合わせ メール（dosokailaw@gmail.com）電話・FAX（022-795-6181）
- ・ 同窓会 HP 東北大学法学部 HP 内の同窓会をクリックしてください。
- ・ 住所変更 できるだけ同窓会 HP の会員情報登録フォーマットを利用ください。
- ・ 同窓会費 年額3,000円。会報送付時の振込用紙を利用ください。コンビニ振り込みは8月末まで、ゆうちょは通年利用できます。コンビニ及びスマホ決済は（株）サルトに委託しています。操作時サルト表示が出て安心してご利用ください。
- ・ 同期会等開催への支援 会合計画中のグループで会報初登場の場合はあらかじめ情報を事務局へお知らせください。名簿情報のフォローや乾杯用アルコールの提供などを適宜行います。

(5) 令和6年度総会審議事項

今年度の総会は7月18日宮城支部総会と合わせて仙台で開催されます。議事内容案は以下の通りです。ご意見・ご異議のある方は7月10日までに事務局までメールまたはFAXにてご連絡ください。なければご了承いただ

けたものとして処理いたします。

1. 令和 6 年度決算案及び令和 7 年度予算案

同窓会報本部だより (1) 掲載の通り。

2. 令和 7 年度同窓会運営方針案

- 1) 支部活動強化⇒山形及び公共院部会の立上げ支援、支部総会時の情報提供強化
- 2) 財政基盤強化⇒会費納入会員発掘・増加策の検討・具体化
- 3) 同期会活性化⇒新たなグループ計画への具体化支援
- 4) 法学部学年委員との接触⇒若手の意見把握、組織化の働きかけ
- 5) 同窓会 HP の充実
- 6) 自主ゼミ支援の強化⇒意見交換会を企画し要望把握に努める
- 7) 会報の充実⇒学内情報をより一層取り入れる

3. 行事企画

本号本部だより (2) 掲載の通り。

4. その他

- 1) 萩友会 他学部同窓会との連絡を強化し、本同窓会の運営の参考とする。
- 2) 中善並木 大学関連部門と連携し仙台市動向に適宜対応を図る。

令和6年度 卒年別会費納入状況 (件数)

卒 年	S22	S23	S27	S28(旧)	S28(新)	S29	S30	S31	S32	S33	S34	S35	S36	S37
件 数	1	1	0	2	3	7	10	7	14	13	16	33	20	22

卒 年	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51
件 数	19	25	16	16	19	32	27	24	25	29	32	28	37	29

卒 年	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2
件 数	38	35	30	34	41	27	33	24	18	27	26	23	17	22

卒 年	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16
件 数	24	19	14	23	8	4	11	5	11	8	7	9	6	5

卒 年	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
件 数	6	11	4	5	4	4	3	4	4	3	1	8	4	3

卒 年	R1	R2	R3	R4	R5	R6	研究院	法科院	公共院	新院生	新学部生	合 計
件 数	3	3	2	2	2	6	15	30	15	37	106	1,341



令和5・6年度卒業生進路状況

3月25日に令和6年度の学位記交付式が行われました。令和6年度の卒業・修了生(9月卒業・修了生含む)は学部生で168名(内女性65名)、法学研究科で修士課程7名(内女性6名)、博士課程9名(内女性2名)、法科大学院で50名(内女子17名)、公共政策大学院で29名(内女性7名)でした。その後川内南キャンパス文系総合講義棟で3名への総長賞、19名(内女性8名)への法学会賞授与式及び祝賀会が行われ、期待と覚悟を持ってあたらしい世界へと旅立ちました。

令和6年度の公共政策大学院関係では、国家・地方公務員関係が国家公務員総合職で総務省・厚生労働省・農林水産省・国土交通省・環境省・衆議院法制局、地方公務員関係で宮城県・山形県・東京都・黒石市・仙台市・上田市、民間関係で七十セリサーチアンドコンサルティング・電力広域的運営推進機関・三菱総合研究所・富士通・日本郵船・日本放送協会・楽天グループ・サンケイビル・パナソニックホールディングスへ就職しました。法科大学院関係では、15名が司法修習へ、35名が司法試験受験を目指して準備中です。

6年度の学部卒業生・研究大学院修了生についての進路状況はデータの開示が会報発行まで間に合いませんので、後日判明次第同窓会HPに掲載し、来年の会報でも報告します。以下は会報前号で掲載できなかった令和5年度の進路状況です。学部卒業生は161名で、就職が110名、進学が41名、就活中その他が10名でした。就職者のほぼ半数は、国家公務員総合・大卒21名、金融業・保険業20名、地方公務員17名でした。具体的先行は以下の通りです。国家公務員総合・大卒では、経済産業省、厚生労働省、国土交通省、農林水産省、文部科学省、青森地方検察庁、宇都宮地方検察庁、新潟地方検察庁、特許庁、参議員事務局、中国公安調査局。裁判所事務官・一般で仙台高等裁判所、仙台地方裁判所、東京家庭裁判所。都道府県上級・大卒で、青森県庁、福島県庁、茨城県庁、栃木県庁、群馬県庁、東京都庁、石川県庁、山梨県庁、静岡県庁。市役所上級・大卒で、弘前市役所、十和田市役所。町・村役場職員で、上市町役場。自衛隊で、海上自衛隊でした。製造業では、清水建設、竹中工務店、JT、カゴメ、ユニ・チャーム、旭化成、NOW ALL、キーエンス、住友商事ケミカル、ダイキン工業、任天堂、村田機械、トヨタ自動車、アイリスオーヤマ、バンダイ、三菱鉛筆、レゴ、東北電力、東電用地、電源開発。サービス業その他では、情報通信業で、NTTデータグループ、NTTドコモ、NTT東日本、TKC、アビシシステムズ、共同通信社、国際システム、仙台放送、トップ、ネットワンシステムズ、野村総合研究所、日立ソリューションズ東日本、ペイカレント・コンサルティング、北海道文化放送、楽天グループ。運輸業・郵便業で、JAL、NEXCO東日本。卸売業・小売業で、伊藤忠エネクス、宮城生活協同組合、良品計画。金融業・保険業で、静岡銀行、七十七銀行、商工組合中央金庫、日本政策金融公庫、日本取引所グループ、日本M&Aセンター、日本カストディ銀行、農林中央金庫、野村證券、みずほ銀行、みずほ証券、みずほ信託銀行、三井住友銀行、三菱UFJ信託銀行、山形銀行、全国共済農業協同組合連合会、大樹生命保険、明治安田生命保険。不動産取引・賃貸業で、ダイビル、三井不動産レジデンシャル。生活サービス・娯楽業その他で、トムス・エンタテインメント、仙台進学プラザ、ナガセ、EYストラテジー・アンド・コンサルティング、電通、博報堂、ライズ・コンサルティング・グループ、リスペクト。進学関係では、東北大学法科大学院が16名、同公共政策大学院が4名、同研究大学院が1名、他に、他大学および他研究科等への進学者が20名でした。また、研究大学院(前期課程)の修了生は3名で、先行は国立大学法人東北大学、RMIT Vietnam University、司法書士法人あおばの杜でした。



自主ゼミだより

○無料法律相談所

皆さんこんにちは！東北大学無料法律相談所（通称：法相＝ほうそう）です。法相は、仙台を中心とした市民の方々の様々な法律相談にお答えする活動をしている自主ゼミです。

法相は、1928年に設立された伝統のある団体であり、現在は約70人の学生が所属しています。具体的な活動内容は、市民の皆様から電話やメールで寄せられた契約や労働のトラブル、親族や相続に関する問題について、大学で学習した法律の知識を用いて、所員の間で法律上の問題点を考え、回答を作成し、教授や弁護士の先生方と検討した上で、土曜日にお客様に回答をお伝えするというものです。活動の期間は、前期が4月から7月、後期が10月から1月となっており、令和6年度は1年間を通して48件の法律相談にお答えしました。当ゼミの活動の中心はお客様からの法律相談に対する回答活動ですが、市内での法律相談の広報活動等も所員が行っています。

また、夏休みの期間には、東北地方のいずれかの地において、地元の方々を対象に相談活動も行っています。令和6年度は、岩手県花巻市に赴き、1泊2日出張相談を行い、多くの法律相談にお答えしました。

法相には、大学で学んだ法律が社会では実際にどのような形で問題となるのか、相談活動を通じて学ぶことができるという、他の自主ゼミにはない魅力があります。大学の授業だけではイメージできないような実務的な法律の用いられ方を学ぶことができる上、大学で学んだ法律知識がどのように活かされるのかを身をもって感じるができます。加えて、実際に市民の皆様や教授・弁護士の先生方と関わることで、コミュニケーションの仕方や礼儀、マナーといった、将来必要となる社会人としての基本を身につけることができることも法相の大きな魅力です。

「自分は法曹志望じゃないけど、しっかり活動できるかな…?」「法律の知識もないけど、回答できるかな…」と不安に思った方もいるかもしれません。しかし、全く心配はいりません！先に述べたように、法相には約70人の学生が所属しており、法曹志望ばかりではなく、公務員志望の人や民間の就職を考えている所員もたくさんいます。また、実際に相談内容を分析し、回答するのは上級生であり、それまではお客様の案内や相談内容の事情の確認をすることが中心となるため、活動の様子を実際に目にしながら、大学で少しずつ法律の知識を蓄えていけば、全く問題ありません。実際、この文章を書いている私自身も、入所当時は知識が無く不安でいっぱいでしたが、今ではしっかりと回答活動を行うことができます。

ここまで読むと、法相がとても堅苦しい自主ゼミに感じられた方もいるかも知れませんが、法相は東北大学祭への出店、ドーナツ会、芋煮会、忘年会、卒コンなど、イベントがたくさんあります。そのため、年間を通して先輩・後輩との親睦を深める機会が多く、友達をたくさんつくることもできます！

最後になりますが、法相にはここに書いた内容の以外にもたくさん魅力があります！兼部・兼サークルすることも可能ですので、ぜひ、新歓のイベントや活動見学に来て法相の魅力を実際に感じてみてください！

みなさんと一緒に活動することを、所員一同心待ちにしております！

E-mail : muryo-sodan@law.tohoku.ac.jp

ホームページ : <https://tohoku-lab.secret.jp/index.html>

○模擬裁判実行委員会

【活動内容】

東北大学法学部模擬裁判実行委員会は「法学部生としての視点から社会問題を取り上げ、裁判劇を通して、市民の皆様には法と社会の関わりについて考えていただくきっかけを作る」という理念のもと、毎年川内萩ホールにて模擬裁判劇の公演を行っています。令和6年度は「学生による闇バイト」をテーマに公演を行いました。

模擬裁判とは、法科大学院等の授業で行われているもので、実際に行われる裁判とほぼ同様の手続きや法律に則っているため、専門用語が多数使われるなど、法律の知識を前提としたものが多くなっています。それに対し、当委員会が行っている模擬裁判は他の多くの模擬裁判と異なり、「劇」の形をとっているため、緊張感のある法廷シーンだけでなく日常シーンも描かれ、法律の知識が少ない方でも親しみやすい内容となっています。

【特徴】

現在は3年生13名、2年生12名で活動しています。基本的に1年生はキャストとして劇に出演し、上級生は演技指導をはじめとする劇作や、団体の運営を行います。全員が一つの劇を作り上げることを目標に活動するため、縦も横も繋がりが強く、大きな達成感を得られることが特徴です。

また、私たちの活動は自分たちの学びも兼ねていますが、社会への法知識の還元を目的としているため、「他者にどう伝えるか」を常に意識しなければなりません。他者を意識して思考することは、法学部生としても一市民としても非常に重要なことですが、模擬裁判の活動を通してその力を身につけることができるでしょう。

詳しい活動内容については、ぜひホームページやSNSをご覧ください。

【連絡先】

E-mail : tohoku.mogisai@gmail.com

HP : <https://tohokumogisai.jimdofree.com/>

Twitter : @tohoku_mogisai

Instagram : @tohoku.mogisai

○法社会学研究会

法社会学研究会（法社研）は、社会問題と法制度との関連を探索していくことを目的として活動している団体です。前期・後期の最初の月に「テーマ」を立て、半年間の基本的な方向性を決定します。例えば、これまでは、医療問題、COVID-19、交通問題、依存症、地方自治などを扱ってきました。こうしてテーマを策定した上で、主には次の二種類の活動を実施します。

1. ゼミ活動 選定したテーマに沿って担当者が社会問題について調べてきて、レジュメにまとめます。そして、毎週の活動の中で、調べてきたことを発表し、それをもとに全体でディスカッションします。最後にディスカッションを踏まえて追加調査記事を作成します。
2. フィールドワーク 普段のゼミ活動での学びを踏まえつつ、疑問や興味のあることや、さらに深く探求していきたいことについて、夏休み・春休みに、その分野に精通した当事者や研究者、行政機関を訪れ、実際の現場の状況や法制度の課題などのお話を伺います。

当会の特色としては次の三点が挙げられます。

1. 時事に強くなれて、日常や就活など他の場面で活かせる！
世間で話題になっている事柄やその背景にある日本社会の構造をしっかりと学ぶことができます。メディアで見聞きする情報が積極的に考えられるようになり、将来的に社会人となった後も大いに役に立ちます。
2. 貴重な経験ができ、社会人にとって必要なスキルが習得できる！
法社研では、フィールドワークを通じて現場の方々からお話を伺うという貴重な経験ができます。また、メールでのやり取りなどのスキルは社会人になってからも有益なものです。
3. 授業、他の部活動・サークル・自主ゼミ、アルバイトと両立できる！
活動が大変かと思われるあなたは心配不要です。期末テストのある期間は休みですし、また、活動への参加は強制ではないので、忙しい人は個々の状況に合わせて対応します。実際、現メンバーも学友会やボランティアなどと並行して励んでいます。また、近年はオンラインも併用するハイブリッド方式を取り入れているため、自宅や大学以外からでも参加可能です。
ぜひ法社研と一緒に活動できることを楽しみにしています！

E-mail: hoshaken_tohoku@outlook.jp

note(ブログ): https://note.com/hoshaken_tohoku

Twitter: @hoshaken

LINE: <https://lin.ee/lihlczc>匿名質問箱: <https://peing.net/ja/hoshaken>

○倶楽部国際法

私たち倶楽部国際法は、名前の通り国際法に関する知識を深め、研究を行う自主ゼミです。

主な活動内容としては、年に数度開催される国際法模擬裁判の大会に出場することです。宇宙法に関する大会、国際人道法に関する大会など様々ですが、夏に行われる Japan Cup と冬に行われる Jessup と呼ばれる大会で結果を残すことを目標にしています。昨年は Japan Cup において総合3位、Jessup において総合3位及びメモリアル書面原告3位という成績を収めることができました。このように他ゼミと比べても精力的に活動しております。

具体的にどのような活動を行なっているのかということを説明いたします。まず大会においては、架空の国際紛争の当事国代理人となって法廷に立ち、それぞれ原告・被告の立場で弁論を行います。弁論の際には、裁判官との対話が重視され、作成した原稿を読むだけではなく裁判官からの質問にも答えて、自国の主張がいかに正しいかをアピールします。この弁論の評価に加えて、メモリアルという弁論をするにあたって主張の中心となる資料も結果を左右する重要な評価点になります。このメモリアル作成にあたってメンバーは問題文が公開されてから何ヶ月も費やします。大会で出題される問題は非常に難解であり相当な労力を費やしますが、その分やりがい大きく、メモリアルを提出した時の達成感は何にも代えられません。

ここまでの紹介から、倶楽部国際法は勉強をする硬派な自主ゼミだと思われるかもしれませんが、しかし、本自主ゼミでは大会後の旅行や芋煮会、BBQ 会など部員全員で盛り上がる行事も多くあります。さらに大学祭にも積極的に参加しており、例年ワッフルを販売しています。メンバー同士で協力をして一から企画・運営をして出店をしています。

このように私たちは日頃から部員の交流の場を多く設け、大会中のみならず親密な連携を取れるよう日々活動しております。

以下にメールアドレスと Instagram・X(旧 Twitter) のアカウントを載せておきますので、私たちの活動

に興味を持っていただけたらご連絡の程よろしく願いいたします。

メールアドレス：tcil.tohoku@gmail.com

Instagram：tu_international_law_club

X アカウント：@clubkokusaiho

○Negoistic!

皆さんこんにちは。東北大学法学部自主ゼミの Negoistic! です。私たちは1、2年生を中心に、毎年11月頃に上智大学で開催される「大学対抗交渉コンペティション」という大会に向けて活動しています。この大会では、大学対抗で「仲裁」と「交渉」を行い、そのスキルを競います。

「仲裁」とは、私人間の紛争を解決する手段の一つで、各大学が企業の代理人となり、自分たちの企業を勝たせるために弁論し合います。準備期間には、問題文を読んで事実関係を整理した後、主張を組み立て、主張内容をまとめた書面を作成し、相手方の反論を考えます。「仲裁」は、実際の裁判に似ており、大会では実務で活躍している方が審査員を担当しています。活動を通して、法律知識や論理的思考力、ディベート力を身に付けることができます。

「交渉」では、企業の副社長や事業部長などの役職につき、相手企業とより良い合意を形成できるように、利害関係を調整しながら話し合います。準備期間では、問題文や各企業の秘密情報をもとに自社の理念や優先順位などを決定し、審査員や相手企業に配布する資料を作成します。「交渉」では、プレゼン力や社会人としての言動、戦略を練ってそれを実践する力が身につきます。

私たちの自主ゼミの面白さは、実際の「仲裁」「交渉」に近いことを大会を通して、楽しみながら経験できる点にあります。活動を通して自分の成長を実感することができますし、大会の後には大きな達成感を味わうことができます。また、同じ目標に向かって努力するかけがえのない仲間ができます。

自主ゼミは、法学部のサークルのような団体なので、気軽に参加することができ、他のサークルや部活との両立が可能です。質問など聞きたいことがございましたら、お気軽にメール・X・InstagramのDMでお問い合わせください。

新しいことに挑戦したい、将来のために役立つスキルを身につけたい、大学生活を充実させたいという方は、ぜひ私たちと一緒に活動しましょう。

【連絡先】

メール：negoistic.tohoku@gmail.com

X：@Negoistic

Instagram：negoistic_tohoku

○公共政策研究会（公政研）

公共政策研究会は、東北大学唯一の政治系自主ゼミとして日々活動しています。弊団体の活動には、通常活動と特別活動があります。通常活動では、学生に身近な「103万の壁」など国内の問題からウクライナ紛争といった外交問題に至る、様々な領域の問題について調べ、レジュメを作成し、それを基に解決策などの議論を行っています。こうした活動を通して、メンバーの社会問題に対する意識を高め、見識を深めることを目的としています。また、官庁等に内定された先輩をお招きして、キャリア講演会などを行っており、将来の進路選択に役立つ活動も実施しています。現在、弊団体は、101名で活動しており、法学部生だけでなく、他学部生も多く在籍しています。昨年度は、副知事や国会議員の方をお呼びした講演会を実施しました。また、国会議員の方をお呼びした討論会も行い、有意義な活動が出来たと実感しております。今年度は、通常活動により目標を持って臨めるよう工夫してさらに学びの深い活動にしていきたいです。弊団体の活動の成果を、所属する学生だけでなく社会に活かせるよう積極的に活動していきます。私たちの活動にご関心を持っていただけたら、お気軽にご連絡ください。ご意見やご提案もお待ちしております。tu.koseiken@gmail.com

○裁判制度研究会（裁判研）

こんにちは、通称裁判研です。本ゼミは自主ゼミのなかで特に活動が緩く兼部兼サークル兼ゼミを前提とし、先輩後輩の交流、勉強の補助の場となっています。

通常活動としては月に二回ほど、空きコマに合わせ各々が気になった重要判例や時事判例について卓を立てレジュメを元に判決を予想し話し合っています。

ゼミ活動の規模としてアクティブな方が十人少し、一回の活動に四人前後が集まります。少人数な分、実際の活動では活動内容以外でも生活や学業の悩み等に触れることもあります。

活動では一つ一つの判例等に対し事実関係から論点、学説を予想し解説を受けることとなります。故に勉強の補助になるのはもちろんですが、たとえ一つの事例であれど具体例と抽象的な法的考えが結びついて記憶でき、話せるようにさえなれる所が特徴です。

部活で忙しいが何かしら法学部内での繋がりを持っておきたいという方や事例を通して法を学びたいと思った方に特に合っていると思います。参加見学をお考えでしたら是非下記のメールへご連絡ください。

メールアドレス：saiseiken.tohoku.law@gmail.com

支部だより

北海道支部

村上 恵也

北海道支部では、令和6年8月23日に札幌市中央区のビヤホールライオン狸小路店にて令和6年度総会を開催いたしました。

当日は、同窓会本部より久保野会長、清水事務局長に、東北大学総務企画部基金・交友事業室より宮川特任准教授にご参加いただき、支部からは支部長以下24名、総勢27名での会となりました。

村上事務局員（H20卒）の司会により、総会で、副支部長交代（後任…本間副支部長（S59卒））および理事交代（後任…西澤理事（H4卒））の報告がされた後、久保野会長のご挨拶と森支部長（S55卒）の乾杯により、ビール会が開始されました。

例年同様に同窓会本部および学士会からの資料が配布さ

れ、清水事務局長からご説明があったほか、参加いただいた会員のみなさまからは、一言ずつ近況報告がなされました。また、「萩丸」の販売再開についてご案内いただき、ご用意いただいたパンフレットはすべて持ち帰られるほど、会員に大好評でした。

最後は、今回初出席である金子さん（H3卒）に締めめの乾杯をお願いし、全員で記念撮影をして盛会のうちに終了いたしました。

北海道支部総会には毎年20名以上の会員に出席いただいており、今年は、相場さん（S61卒）と金子さん（H3卒）の会員2名に初めて出席いただきました。北海道では決して多くはない同窓会員が接点を持つことが出来る貴重な機会として、引き続き会員拡大に努めてまいります。

次回は、令和6年8月22日（金）18時から今回と同じ札幌市中央区のビヤホールライオン狸小路店で開催を予定しております。会員のみなさまのご参加をお待ちするとともに、お近くと同窓生の方がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介くださいますようお願いいたします。



札幌市中央区のビヤホールライオン狸小路店で開催を予定しております。会員のみなさまのご参加をお待ちするとともに、お近くと同窓生の方がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介くださいますようお願いいたします。

（北海道支部事務局 村上 恵也 H20卒）

岩手支部

「令和6年度岩手支部総会開催される」

前田 敬之

令和6年度岩手支部総会は、令和6年7月26日（金）に、ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイングにおいて開催されました。当日は、同窓会本部から、来賓として清水廣行事務局長をお迎えし、参加者は19名に留まりましたが、活気ある懇親会となりました。

開会に先立ち、長きにわたり多大な御支援をいただいた川村登顧問の計報が報告され、一同で故人を悼みました。

懇親会では、斎藤雅博先輩（S51卒）の乾杯の後、急遽御欠席となった久保野恵美子会長のメッセージが披露されました。続いて清水事務局長から、最近の法学部・法科大学院に関する話題提供をしていただき、更に、東京オフィスの宮川司特任准教授から、七大戰など現役学生の活躍ぶりを披露していただき、会場は

大いに沸きました。

続いて、恒例の近況報告が行われました。県内各界において幹部・中堅職員として活躍中の会員からは仕事の状況について、また、年配会員からは、毎日の健康法や余暇活動の様子をご披露いただきました。業界や年代の垣根を越え、あちこちで話が花が咲きましたが、お開きの時間となり、千葉茂樹先輩（S52卒）の中締めにより、名残惜しくも散会となりました。

新型コロナウイルスの影響による中断を経て、再開3年目となる今回は、手指消毒の徹底など基本的な感染対策行動も定着



東北大学法学部同窓会岩手支部総会
令和6年7月26日 盛岡ニューウイングホテル

し、ようやく落ち着いて杯を酌み交わす姿を拝見することができました。

感染症蔓延や自然災害など予期せぬ出来事が起こります。が、それ故に年に一度顔を合わせられることの大事さを噛みしめています。来年度も、7月下旬の開催を進めておりますので、多数の皆さんのご参加をお待ちしています。また、支部の活動に関心をお持ちの方は、事務局あて御一報いただければ幸いです。

(H5卒、岩手支部事務局長
前田 敬之)

秋田支部

秋田支部総会を

開催しました

山 田 芳 浩

令和6年度における秋田支部総会は、令和6年10月18日金曜日午後6時より、秋田市のアキタパークホテルにて開催いたしました。今年は24名の会員の皆様にご出席いただいたほか、本同窓会会長の久

保野恵美子先生や清水廣行事務局長（S39卒）、そして佐竹敬久秋田県知事（本学工学部S46卒）にもご来賓としてお越しいただき、賑やかな会となりました。特に教員の先生方のご出席は、平成28年度の中林暁生先生以来となります。ご多忙にもかかわらず遠路はるばるお越しいただきました久保野会長には、心より感謝を申し上げます。

懇親会では、支部顧問の嵯峨正博さん（S31卒）のご発声による乾杯の後、和氣諺々とした雰囲気では進行し、参加者は大いに交流を深めました。また、久保野会長及び清水事務局長よりご挨拶を頂戴し、最近の本学及び仙台市の様子などもご紹介いただきました。

特に印象的だったのは、本学が全国初の『国際卓越研究大学』に認定される見込みであるとの嬉しいニュースでした（※秋田支部総会開催日時点では認定前でしたが、その後、令和6年11月8日付で正式に認定されたとのこと

す）。学術研究については門外漢ですが、わたくしも一卒業生として、母校が全国トップクラスの研究を行う大学だと認定されたことを誇らしく思います。おそらく、他の会員の皆様も同じお気持ちだったのではないのでしょうか。

他方で、清水事務局長が今年度一杯で退任される旨をお聞きしたときは、残念でなりませんでした。わたくし個人としても、毎年二次会をご一緒してカラオケをするのが楽しみでしたので、美声を拝聴する機会がなくなってしまうのは、寂しい限りです。この紙幅をお借りして、清水廣行さんの本同窓会に対する長年のご功績に敬意を表しますとともに、益々のご活躍・ご健勝をお祈り申し上げます。

このほか、余興として本学にちなんだクイズ大会も行いました。正直なところ、「自分も卒業生なのだから、全て簡単に答えられるだろう。」と高を括っておりましたが、想定以上の難問ばかりで、参加者一同で頭をひねってクイズ

に挑みました。お陰様で、母校の知識を一層深められ、楽しい時間となりました。

懇親会の最後は、学生歌「青葉もゆるこのみちのく」を全員で斉唱いたしました。今回は古井正賢さん（H4卒）にリードをお願いしました。毎年恒例ですので、やはりこれがないと会が締まらない感じがいたします。同時に、本学との絆を再認識する瞬間だと実感した次第です。なお、当日は学生歌の歌詞カードを配付しておりますの

で、記憶に自信のない方も安心です。

秋田支部の会員は、伝統的に官公庁（特に秋田県庁）関係者が多いのですが、市町村や民間企業、専門職（士業）の方々もいらつしゃいます。少しずつではありますが、出席者の若返りも進んでおります。アラフォー以下の世代の方々も珍しくなくなりました。また若千名ではありますが、初めて参加される会員の方もほぼ毎年いらつしゃいます。年齢・性別・職域を問わず、同窓のよしみで交流を深められ、公私の交友関係を広げられる貴重な機会ですので、今後とも多くの会員の方々にお越しいただきたいと思っております。

最後に改めまして、ご出席いただいた皆様と、準備に奔走しつつ勧誘・掘り起こしを頑張っていたいただいた役員・幹事及び常連会員の皆様に、感謝を申し上げます。

次回の開催日程は未定ですが、決まり次第、ご案内を差し上げます（例年は夏から



秋頃の開催です)ので、皆様のご出席をお待ちしております。秋田県内に転入された方や、興味があつて参加したいが案内が届かないという方は、お手数をおかけしますが、同窓会本部または秋田支部までご連絡ください。

【同窓会本部連絡先】

この会報やWebサイト等に記載のとおりです。

【秋田支部連絡先】

秋田支部幹事 後藤 文豪 (H18卒)

Gotou-Fumitake@pref.akiita.jp

(支部長 S53卒)

宮城支部

I 支部だより「宮城支部」

渡 辺 泰 宏

令和6年度は、コロナ以前の活動に復帰することが出来、「7月総会」と「11月役員幹事懇談会」を開催致しました。

1. 66名の総会開催

令和6年7月12日(金)午後6時より宮城支部総会を仙台駅東口の「仙台ガーデンパレス」において開催しました。今回は宮城支部単体での開催でしたが、当日は自主ゼミ代表の現役学生も招待しながら、総勢66名の参加を頂きました。

総会では、春の叙勲で旭日

重光章を受賞された荒中(あらただし)支部長より国際卓

越研究大学認定での同窓会の

役割や各界で活躍される同窓

生へのエールを込めたご挨拶

に続き、令和6年度より同窓

会長に就任された久保野恵美

子法学研究科長よりご来賓の

挨拶を頂いた後、ポストコロ

ナで活動を本格化させる今後

の活動計画などが承認されま

した。役員改選では、長年副

支部長として支部を支えて頂

いた三浦秀一氏(S47)が退

任され、前同窓会長の戸澤英

典教授の顧問ご就任、新たに

佐野好昭氏(S58)、梅内淳氏

(S63)、鈴木覚氏(H4)、入

江恵一郎氏(H6)の理事就任が了承されました。

その後の懇親会では、久々の再会やマスクから解放されたことから(?)談論の輪が広がり、企業や行政・法曹界の近況、さらには現役学生の皆さんからの報告等をまじえ、最後は「青葉もゆる」を斉唱し、極めて盛況のうちに会を終了することが出来まし

た。なお、令和7年は7月11日(金)に本部との合同総会を予定しており、会場は「仙台ガーデンパレス」から仙台駅西口最寄りの「ホテルJALシティ仙台」に変更となります。多くの方々のご参加をお待ちしております。

2. 役員幹事懇談会
令和6年11月14日(木)午後6時より、「ホテルJALシティ仙台」において17名が参加しました。荒支部長の冒頭挨拶後、ご来賓の久保野恵美子同窓会長のご挨拶に続き、本部ならびに宮城支部・東北芝蘭会の活動報告を行いました。

卓話には、当初阿南友亮(あなみゆうすけ)法学研究

科教授より「3期目に突入し

た中国習近平政権の意味」を

拝聴する予定でしたが家庭事

情から急遽予定変更となり、

久保野会長より「家族法改正

と子の利益」の卓話を頂戴致

しました。平成以降の家族法

の改正の中で、「子」の利益と

主体性が重視され、今後は家

族関係の位置付けにも波及す

るとの論説に当世の流れをし

かと感得出来ました。

その後の懇親会でも、丁度

NHK朝のドラマの「寅に

翼」の話題や東北芝蘭会と

(大学本部同窓会組織の)紫

蘭会共催の交流会、さらには在学時代の法律との関わり・



(役員幹事懇談会集合写真)

福島支部

福島支部総会を開催いたしました

板 垣 良 夫

令和6年10月25日(金)に、支部会員24名の出席のもと第45回東北大学法学部同窓会福

島支部総会を開催いたしました。総会では、令和5年度事業報告及び決算の承認並びに令和6年度の事業計画及び予算の審議などの支部運営の基本となる案件を御審議いただきました。

総会後の懇親会では、同窓会本部から久保野恵美子同窓会長（法学研究科長・法学部長）と清水理事事務局長、東北大学法学部総務企画部基金・校友事業室から宮川司特任准教授に御臨席を賜りました。

福島支部恒例のミニ講義として、久保野同窓会長から家族法改正をテーマに御講義いただきました。教授の明快で丁寧な説明は、複雑な法改正の背景やその意義を分かりやすく解きほぐし、学ぶ楽しさを再確認するとともに、学生時代の法律を学ぶ中で感じた知的な刺激や議論の深さがよみがえり、懐かしさとともに新鮮な気持ちになりました。

また、清水事務局長からは、大学の近況、同窓会本部、他支部の精力的な活動状況な

どについてご紹介いただくとともに、宮川特任准教授からは、東北大学の認知度向上と未来の学生獲得に向けた活動状況について説明をいただきました。

その後、歓談に移り、美味しい料理とともにお酒も進み、法曹界、民間企業、政治・行政など、各界で活躍される会員の皆様が、学生時代の懐かしい思い出話や、仕事や家庭のことなど、それぞれの歩みを語り合い、親睦を深めるひとときとなりました。懇親会は終始和やかな雰囲気が進み、最後は参加者全員で学生歌を合唱し、盛会のうちに幕を閉じました。

令和7年度の福島支部の総会は、10月31日（金）午後6時、杉妻会館にて開催を予定しておりますので、さまざまな分野で活躍されていらっしゃる皆さんは多忙であられますが、日ごろでは得難い交流を持つことができるのが、この会の大きな魅力のひとつでありますので、お時間が許せば、是非とも、ご参加くだ

さいますよう、お願い申し上げます。

なお、転勤等で福島県へ転居された方など、住所や勤務先等の変更がございましたら福島支部事務局担当メールアドレス宛てにご連絡ください。

（支部事務局担当 H12卒
板垣良夫 E-Mail: tohokulaw.
fks@gmail.com）

山形支部

新時代の山形県同窓会支部に向けて

長 澤 好 光

山形県法学部同窓会は、昭和53年に結成され、その後、毎年、有志による総会を開催してきました。平成7年に、山形県全学同窓会の組織結成の動きが出てきた際にはその中核として活動し、その後は、全学同窓会事務局を担って来しました。法学部同窓会の中核メンバーが亡くなったたりして中断を余儀なくされており、単独で無く2年に1回程

度の頻度で開催される全学同窓会総会に多くの同窓生の参加を図り、あわせての開催のような形式になっています。全学同窓会は、新型コロナウイルス禍の中でも開催され続け、今年度も11月に第15回として開催される予定です。今回も、これまでの経緯もあり、小生（長澤）が山形県全学同窓会会長として、総会の盛会に向けて活動し始めているところです。

恒正義氏（昭和54年）、金融界では、元きらやか銀行頭取の栗野学氏（同）など多士済々の状況です。また、弁護士土田文子氏（平成19年）など、若い女性の進出も目立っています。また、森谷俊雄氏（昭和53年）も河北町長として御活躍中です。

今後は、こうした中堅の方々を中核に置き、新しい時代に合った、同窓会組織を再構築していくことが肝要と考えています。このために、当面は、前述の全学同窓会の盛会と全学同窓会への法学部同窓生の出席参加を奨励し、その中から、新しい時代を担う、中堅、若手に同窓会活動に入ってきていただき、支部執行部を立ち上げるのが良いのかと思っています。

かつて、先輩が続けた同窓会においては、「ゆるやかな連携と結合」を目指して、無理することなく、自然体での同窓会活動を目指したものであります。

再構築を目指す、法学部単体の同窓会組織についても、

そうした姿勢を基本として行こうと考えています。

この場を借りて、山形県内の各同窓生の御理解と御協力をお願いするものであります。

(萩友会代議員 S46卒)

新潟支部

水内 基成

新潟支部は令和6年度の活動として、9月7日(土)に新潟東映ホテルにて支部総会・懇親会を開催しました。当日は、本部の久保野恵美子同窓会長、清水廣行事務局長、宮川司特任准教授東京支部会事務局長を含む21名の参加をいただきました。

久保野会長からは自主ゼミ・倶楽部国際法が国際法模擬裁判の大会(JAPAN Cup 2024)で好成績をあげたことが紹介され、後輩の活躍を誇らしく思いました。宮川特任

准教授からは学部の枠を超えた大学同窓会の交流深化の構想が熱く語られました。清水事務局長からはいつもながら

の豊富な資料に基づき母校と同窓会の今を伝えていただき、貴重な機会となりました。参加者各位の近況報告も多様で大いに懇親を深められましたし、有志による二次会も大変盛り上がりしました。昨年度のこの支部だよりを見て新たに参加を申し込んでくれた方もあり、嬉しかったです。

新潟支部の皆様は、顔触れや経歴も多彩で、先輩方も偉ぶらない気さくな人柄の方ばかりです。平成10・20年代卒の若い方も参加していただいています。若手の会費や、同窓生どうしのご夫婦、お子様連れでの出席者の会費を減額する取組を行っています。新潟の河原で芋煮会、弥彦山の麓で武石支部長を囲む会などを妄想中ですが、いつか実現したいです。

令和7年度の総会・懇親会は9月6日(土)18時、新潟駅に直結のアートホテルにての開催を予定しています。新潟県に在住の同窓生の皆様、転勤、就職等で新潟県

に転居、Uターンされた同窓生の皆様から関心を持っていただけるよう努めます。こちらでもアンテナを高くしてお待ちますので、同窓生の情報を随時お寄せいただけますと幸いです(水内メールアドレスまで:m-nizu@theia.ocn.ne.jp)。(H12卒)



東京支部

法学部同窓会本部・

東京支部会合同総会を行いました

令和6年7月6日(土)、東京八重洲のサピアタワーにて、会員73余名の参加で、令和6年度の本部総会、東京支部会総会が開催されました。

本部総会の後、紙本達宏さん(H9年)の司会進行のもと、会長の清野智さん(S45年)の開会挨拶、事務局長の澤田淳さん(S45年)から同窓会の活動報告、野神照幸さん(S52年)から会計報告が行われました。

総会では、清野会長がご退任され、原田一之さんが会長に、中里妃沙子さんが副会長にご就任されることになりました。

新理事として、船戸里佳子さん(令和2年卒)、佐々木邦夫さん(令和3年卒)、山田洸太さん(令和4年卒)、菅原拓磨さん(令和5年卒)が加わることが了承されました。

その後、久保野法学研究科

長から最近の大学についてのお話をいただきました。

萩友会(全学同窓会)からは、萩友会プレミアム会員特典、七大戦などの学生活躍の話がありました。

引き続き、懇親会では、原田一之さんの挨拶乾杯の後、野村太郎さん(公平成27卒)の司会により和やかに、各々懇親の輪を広げました。

今年は、昨年度まで法学研究科長をされた戸澤教授、副研究科長の阿南教授も参加され、教え子を始めとした同窓生と活発なお話がされていました。

また、一同、長年、支部会を支えて頂いた清野前会長、澤田前事務局長には感謝を繰り返し申し上げながら、お話をされていました。

総会は、各界の同窓生が会して旧交をあたため、新たに知り合いを作り、その後のビジネスや人生において良い目で活用して頂ける良い機会だと思えます。ビジネスの場から離れたところで同じ業界の先輩や異なる業界の同窓の

方々とネットワークを持つことはきつと有意義なことだと思います。

今回の東京支部会総会は、令和7年7月5日(土)に開催されます。どのような方が参加するのかわからない、会費が高いなど、若い世代には敷居が高く感じてしまう面があるとの声を受け、今年度の懇親会は、支部会初の試みとして「芋煮会」として芋煮をはじめ、東北の品々をご用意することとし、会費の値下げを行うこととしました。当日腕を振るっていただく予定の山形県出身の理事をはじめ、理事一同、新たな形での懇親会も楽しんでいただけるよう準備に努めますので、ぜひ同窓会で久しぶりに東北を感じてみませんか。

東京支部会事務局からのお願い

通信費上昇対策として、今後、総会などのご案内については、ハガキを極力用いずに、萩友会HPや萩友会メールマガジンでお知らせします

ので、「萩友会メルマガ」への登録をお願いします。

(メルマガイメージとQRコード) QRコードをスマホのカメラ機能で読み込むと入力画面に遷移します。

(事務局長 宮川司 H2卒)



東海支部

東海支部総会

(R6.5.17開催)

森 亮太

令和6年5月17日(金)、東北大学法学部同窓会東海支部総会及び懇親会が「純系名古屋コーチン」(くるる)(名古屋市中村区名駅4-13-11)にて開催されました。東海支部会員22名に、東北大学法学部長・法学研究科長・同学部教授の久保野恵美子様、東北大学法学部同窓会東京支部「萩友会」(全学同窓会)の宮川司様を迎えた合計24名の参加となりました。

東海支部総会は、老舗料理店やホテルにおいて開催されることが通例となっていました。今年度は、名古屋駅にほど近い名古屋コーチン料理の居酒屋で開催しました。

佐野眞琴支部長(昭和56年卒)の開会挨拶に始まり、久保野様、宮川様からもご挨拶をいただきました。一同、現在の東北大学の活動状況を熱心に聞き入っている様子が印象的でした。東海地区では、日頃、東北大学とのつながりを感じる機会はそう多くないというのが実情ですが、その分、興味をそえられる内容でした。そして、会の中盤には、参加者全員にスピーチの時間が割かれ、学生時代の思い出や、卒業後の同窓生間の関わりを中心とした思い出話に大変盛り上がりしました。終盤に恒例イベントの応援歌「青葉もゆるこのみちのく」の合唱が行われた後、全員で写真撮影をして締め括られました。

さて、令和7年度の東海支部同窓会は、令和7年5月16日(金)午後6時30分開始を予定しています。会場は、昨年同様、「純系名古屋コーチン」(くるる)を中心に現在検討中です。ぜひ東海地区にご在住の方で、出席を希望される方、幹事から総会開催のご案内が届かない方がいらっしやいましたら、幹事の私(連絡先052-951-7737(勤務先))までご連絡くださいますようお願い申し上げます。(H19卒)

大阪支部

藤原 武士

大阪支部の同窓会を令和6年10月19日、十三にあるプラザホテル大阪 大湖苑で、開催しました。昨年までは、金曜日の晩に開催していたのですが、仕事の都合で参加しづらい、遅くなると家族が心配する等のご意見もあり、今年は、私が幹事になって初めて、土曜日のお昼に開催しました。

27名の同窓生に参加していただき、仙台からも、戸澤先生、同窓会本部事務局の岡崎先輩、東京支部からは、事務局長の宮川先輩にご出席いただきました。東北大学法学部の現在の様子をお伝えいただきました。

今年は、法理学の青井秀夫先生がご子息(同窓生)と一緒に参加されました。土谷先輩は、ご子息が東北大学の学生の時に、代わりに青井先生の講義のレポートを書いたというエピソードを披露されたり、参加者の皆様から、近況

報告をいただき楽しい時間でした。毎年参加していただいている兵庫県議会議員の山本先輩が欠席され、ニュース等で騒ぎになっている兵庫県知事のお話をお伺いできないのが残念でした。

二次会は少数ながら、がんこ寿司十三総本店で行われました。大阪の十三は、お昼から、いくらかでも飲める場所があります。かなり、痛飲し、記憶がなくなり、どうやって帰ったのかも分からなくなつたのですが、2月に仙台の国分町で飲むという約束をしたらしく、戸澤先生も来てくれるとのこと、令和7年2月28日、国分町の凱旋門ビル近くで飲むことになりました。

今回、土曜日のお昼に開催することで、幹事としては、開催の準備が楽になり、参加される同窓生も参加しやすい環境になると思っています。

来年は、令和7年10月18日午後1時から、大阪支部の同窓会を開催する予定です。お声がけを早く行おうと考えています。

いますので、ぜひ、関西に住む同窓生の方は、ご参加いただけることを願います。

(支部事務局長H8卒)



広島支部

支部だよりー広島支部
総会・懇親会ー

風呂橋

誠

広島支部では、令和6年6月1日(土)午後5時30分から、18名が参加して、総会と懇親会を開催しました。

久保野恵美子法学部教授
(研究科長・学部長・同窓会

長)、岡崎隆一事務局次長、宮川司東北大学総務企画部特任准教授・東京支部会事務局長にご参加を頂きました。

令和5年と同様、居酒屋・かめ福での開催で、懇親会

は、瀬戸内海の魚などのコース料理とおいしいお酒で会話がはずみました。令和6年はちゃんと記念写真も撮りました。

令和7年の支部総会は6月14日(土)の予定です。より多くの方に参加して頂き同窓会ならではの楽しいひとときを過ごしましょう。

広島支部
事務局長 風呂橋 誠S63卒



法科大学院支部

令和6年度東北大学法学部同窓会法科大学院部会総会、記念講演会のご報告

1 はじめに

令和6年11月30日(土)、令和6年度東北大学法学部同窓会法科大学院部会総会、及び、記念講演会、司法試験合格者との就職説明懇談会、懇親会(兼合格祝賀会)が開催されましたので、ご報告いたします。本年度は、前年度と同様、東北大学法科大学院エクステンション棟での現地参加と、ZOOMを用いたウェブ参加とを併用するハイブリッド開催と致しました。

2 第1部 記念講演会

東北大学法科大学院の第1期の同窓生であり、現在、弁護士として、インターネット上の誹謗中傷、風評被害に関する事件に数多く取り組まれ、活躍されている大熊裕司同窓生(虎ノ門法律特許事務所)に「SNSやネット上の誹謗中傷・風評被害対策に関する法律実務(1)発信者

情報開示請求、(2)Googleマップのクチコミによる名誉・信用毀損事案などを中心

に「(予定)」と題して、当該分野の最新の事件処理の実情について講演していただき、大変有意義なものとなりました。

3 第2部 総会

講演会終了後、ウェブ会議を併用しての総会が開催されました。

部会長からの開会の挨拶、法科大学院長からのご挨拶を経て、協議・報告に入りました。

次期役員として、布木綾部会長(新)、渡辺拓也副部会長(再)、岡洋祐副部会長(再)、白戸祐丞副部会長(新)が選任されました。

報告事項につきましては、ロースクール教育の現状と課題、法曹資格者に対する継続教育の取組み、就職支援説明会などの活動等についての報告がなされました。

また、卒業生メーリングリストの運用状況等に関するご報告がなされました。

4 同窓生と司法試験合格者

との懇談会

また、本年度は、同日午後2時30分より、午後4時までの講演会の間に、同窓生の有志と、司法試験合格者との間で、就職活動や司法修習の準備などに関する情報提供を目的とした交流会が催されました。

遠方から参加した同窓生も加わり、多数の合格者・同窓生により、用意した時間をいっぱいに利用し、非常に活発な懇談会となりました。

5 懇親会・合格祝賀会

同窓生による懇親会と、司法試験合格者が参加しての合格祝賀会を合わせて実施しました。遠方からも多くの同窓生に参加して頂き、教員の先生方を始め、旧交を温めるとともに、合格者の前途を祝うことができました。

6 総括

本年も、昨年度に引き続き、司法試験合格者との懇談会、合格祝賀会を同時開催することで、司法試験合格後の同窓生への情報提供や同窓生とのつながりをつくることの助となったと考えられます。

今後も、リアルとウェブを組み合わせ、多くの同窓生が参加しやすい環境作りに努めていきたいと思えます。

当部会としましては、今後も同窓会の発展に努めて参る所存ですので、ご支援の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

(前部会長 伊藤今日平 H24 院卒)

以上



同期会だより

35J青葉会

仙台居住の仲間に一関・小山・調布等からの遠征組を交えて旧交を温める会を不定期ながら毎年続けています。昨年12月の会には山梨の同期A君の育てた柚子を小山のA君がジャムに加工して持参いただきました。今年は4月11日に花見を兼ねて7名が参

加し開催しました。気候が一定せず開花宣言日程もたびたび変更されもししたら葉桜かと氣を揉みましたが、予想外の寒の戻りもあり満開見頃となり、片平に集合してレストラン荻で昼食後片平キャンパスの桜を眺めたのち、川内に移動し中善並木・西公園の桜で一杯飲みながら、本人や連れ合いの健康・蔵書の終活方策などお互いの状況情報を交換しあいました。35Jの皆様どなたでも仙台へ来られて時間が許すならご一報ください。都合のつく何名かで再会しましょう！

(清水)

42J1組同級会

昭和42年入学の私たち法学部1組の学生は80名でした。今回を含め、今までに5回開催しました。1回目は1993.4.15仙台、2回目は2013.11.20東京・新宿、3回目は2014.4.26東京・八重洲、4回目は古希同級会として2018.10.18

東京・学士会館、今回5回目は喜寿同窓会として東京・学士会館での開催でした。

しかし、高齢化が進み故人10名、住所不明10名、体調不良者が15名になりました。今回は健在な方のうち24名が出席しました。卒業以来初めてお会いする方もあり、感激の再会でした。乾杯は法学部同窓会ご提供の「萩丸」で、「美味しい」と大好評でした。

喜寿を迎え、同級生は皆好々爺になりましたが、昔の面影は十分に残っており、話し方も昔のままで、あつという間に20歳の青年に戻りました。女性は当時4名おりま



したが、故人になったり、体調不良などで1名の参加にありました。

一次会は各自の近況報告であつという間に過ぎ、最後は「青葉燃ゆるこのみちのく」を全員で大合唱して終わりました。二次会は近くのレストランで17名が集まり、2時間ほどゆっくり話すことができました。「80歳にまた集まろう」との声が多かったのですが、さて、どうなることやら・・・?

(文責…金田 清)

プラマイ会

2024年9月27日、仙台においてプラマイ会仙台ランチの集いが開催された。基本、東京で毎年2回開催(5年に一度は仙台)の当会は2019年11月14日に開催されて以来、新型コロナウイルスの影響もあり、中断となっていた。が、わずかに2022年、2023年と仙台ランチの集いが開催され、細々とその命脈を保つてき

た。

その流れを汲む、仙台ランチ会は、仙台駅近の「ホテルメトロポリタン仙台」の、はや瀬で開催された。食事は日本料理のコースである。参加者は6名。関東から2名、仙台から4名。多いとは言えないが、話が見える距離も満更悪くもない。個室で乾杯の後、めいめいから近況を語ってもらう。どうしても病気の親の介護の話は避けて通れない。健康維持の話も出る。仕事でまだ現役の仲間もいる。話すとき昔の学生時代に戻る。懐かしい面々との楽しい会話、美味しいランチ膳。2時間半もあつという間に過ぎた。来年の再会を誓って、記念写真を撮り、お開きとなった。

参加者は、菅原通孝・菅原悦郎・鈴木敏明・萩原孝次・津久井恵・和田義則 でした。

このプラマイ会、昭和43年入学、昭和47年卒業の方であれば誰でも入れます。そのため、プラマイ会と称していま

す。

2025年こそは、東京でプラマイ会を再開したいと思っています。熱く仙台を語り合いませんか。

世話人、和田義則、メールアドレス norichanw@yahoo.co.jp で連絡をお待ちしています。

(文責 和田義則)



模擬裁OB会

『40年以上続く模擬裁OB会活動 in 東京』

タイトルは誇らしいものですが、ここでは模擬裁判実行

委員会(以下、「模擬裁」)に在籍していた昭和51年(51J)から昭和55年(55J)入学を中心とした当時の模擬裁メンバーがささやかに続ける卒業後の交流を披露するものです。

小生は54Jですが、入学当時の4年生を筆頭とする歴代の諸先輩のリーダーシップ・人格・識見が素晴らしく、ビジネス、パブリック、アカデミックと各界で活躍する(した)メンバーが定期的に集まっております。

模擬裁の活動は、様々な自主ゼミが群雄割拠する現在と違い、在籍当時は法律相談所と模擬裁しか存在しておらず、法学部棟入口左側の部屋を拠点とさせていただき、誇り高く昼夜活動していました。テーマとストーリー、法

素や広告・宣伝活動にも驚くほどレベル高く(?)取り組み、結果、当時の川内記念講堂に非常に多くの来場者を集めたことが思い出されます。

在京のメンバーは、風貌も知力も当時のままで(?!),可能な限りで年一回程度参集し、40年以上にわたって交流を深めてきました。現在では、多くが勤め人としての人生を一度は卒業し、各々の第二の人生を謳歌しています。ITテクノロジー発達のおかげでメールリングリストも、連絡が取れる限りで、整備され



てきており、東日本震災の際の安否確認も含めて、在京、在仙、全国各地の当時のメンバーのコンタクトに役立っています。

還暦も超えたこの年代になると、こうした同窓会活動が盛り上がってくるのが世の常ですが、皆が多忙でなかなか仙台で集まらないこと、現役を始めた他世代の皆さんとの交流が欠けていたことが反省点です。是非、機会を得て、これからの活動の幅が広がればと願っております。(吉岡雅博 S58卒)

S60J4組

35年ぶりの再会

2024年4月20日(土)の夕方、久しぶりに大学時代の仲の良かったメンバーと集まろうとなり、新橋の焼鳥屋さんを4人で予約しました。ところが、そのうちの一人が60J4同窓会のグループLINEへ書き込んだところ、話がどんどん広がり、最終的に19名の参加となりました。

た。クラスの4割にあたる人数です。北は北海道、南は香川からわざわざ駆けつけてくれた同級生もいて、嬉しかったですが正直びっくりです。幹事として、お店に何度も人数変更の電話をすることになり、途中からお店の方に少し呆れられている感じでした。

35年ぶりに顔を合わせたメンバーが大半でした。それでも、そのブランクがなかったかのように、昔のトーンで自然に会話がころがっていきます。学生時代の思い出話や現在の近況報告、そしてこれからの楽しみ?不安?など、話題は尽きることがありません。一部のメンバーは0次会から始め、3次会まで盛り上がったようで、そのエネルギーに、東北Spiritを感じました。

私自身、大学時代の有難さ、貴重さを改めて実感しました。当時、同じ時間・空間を過ごした場があったからこそ、今もこうして集まり、楽しく時間を過ごせる仲間がい

るのだと思います。

会の終わり頃に、今年がオリンピックピックイヤーだったので、「次は、4年後のオリンピックピックイヤーに仙台で!」との話に。次回幹事のS君とD君、宜しく願います!

今回都合がつかなかったメンバーとも、ぜひ次回は一緒に盛り上がりたと思っています。末筆となりましたが、今回の集まりをご紹介させていただく機会をいただけたこと、御礼申し上げます。

知見寺直樹(昭和60J4組)



44J同期会計画

44J同期会を開催します

44Jの皆さんお元気ですか?下記のように同期会を企画しています。同窓会名簿での往復はがき連絡も5月末からできるだけ進めて行きますが、全員把握が難しいので、連絡有無にかかわらず、参加可能な方は下記までお知らせください。

日時…11月1日11時30分開
会場…マロウドホテルイン赤坂 会費…10000円予定
(振込予定で検討中)連絡先…
前川渡 東京都港区赤坂2-11-3 福田ビルウエスト7階
前川・伊藤法律事務所 ☎03-6751-6711 連絡期限…
2025年9月30日



